

明治小説文章變遷史

德田秋聲述



德 田 秋 聲 氏

目次

第一章 渾沌時代（明治十二年まで）……………

『花柳春話』まで——最低級な文學——英國思想——西洋道中膝栗毛——鶴的な文體——
胡瓜菰——『かたわ姫』——柳北翁——『柳橋新話』と『花月新話』——福地源一郎——とさ
文體——福澤と中村

第二章 翻譯文の勃興（明治二十年まで）……………

『緊思譯』——『もしや草紙』——才子佳人の奇遇——逍遙の翻譯——翻譯文學の新生面——
周密文體——ジュエール・ベルヌの小説——口譯——饗庭篁村——禁短氣——ユーモリ
スト——『三筋町の商人』——鳴鶴と鐵腸——言文一致の意義

第三章 言文一致體の創始(明治三十二年まで)……………

馬琴調の破壊——四迷と美妙——雅俗——『浮雲』——「だ」と「ず」——文壇正倉院——
「てめる調」——美妙と紅葉——雅俗折衷——『書生氣質』の文體——逍遙と鷗外——柳浪
の言文一致——撥鬢小説——ローカル、カラー——「葉」——郷土藝術論——翻譯——思
軒調——鷗外と二葉亭

第四章 新文章の完成(明治三十三年以後)……………

文壇末流論——『武藏野』——小栗風葉——文士講談——二大缺點——諸家の意見——自
然主義と言文一致——田山花袋と新文體——實經驗——没技巧論——柳浪と自然主義——
文章の力——文の新舊——寫生文と新文體——漱石と露伴——近代文藝の特色——セ
ンジュアリズム——イムプレツシヨニズム——シムホリズム——ソフトな文體

明治小説文章變遷史

徳田秋聲述

第一章 渾沌時代（明治十二年まで）

『花柳春話』迄——最も低級な文學——英國思想——西洋道中膝栗毛——鶴的な文體——胡瓜
扱——『ひたわ娘』——成島柳北翁——『柳橋新話』と『花月新話』——福地源一郎——とさ文體
——福澤諭吉と中村正直

徳川文
學の未
流

明治十二年織田純一郎がリットンの小説マルトラバースを譯して『花柳春話』と題し、阪上育英舎から出版し、兎も角も西洋小説の新構造新規模を我が小説壇に紹介したまでは、我が小説壇にはとりたて、云ふ程の

事もない。政治上の維新は決して文學上の維新では無かつた。僅かばかりの變遷と、外部に彰れないまでも内に充ちて來る革新的推移力とはあつたが、要するに徳川文學の末流が、消えかゝつた燈火のやうに明滅し、多忙な世上の大變亂に應接するそれを文藝に反影するだけの餘裕も力も皆目無かつた。

明治十年までに小説と名づけられる程の出版物を數へて見るなら、魯文の『假名讀八犬傳』『西洋道中膝栗毛』『安愚樂鍋』『胡瓜扱』、萬賀亭應駕の『釋迦八相倭文庫』五十九六十、二代目春水の『時代加賀實』四十編乃至四十五編及び松村春輔の『復古夢物語』『春雨文庫』『近世櫻田紀聞』を擧げたらそれで盡きる。

假名垣

魯文

此のうちではんの僅か來の文體に變遷を見せたのは假名垣魯文だけである。魯文には學殖も識見も無く、加ふるに貧しい肴屋の倅であつて、小僧となつて生長する間に終に文字を獨習したに過ぎぬ、且つ頗る放縱な生活に親み、流浪漂泊の末は、遊女上りの妻と九尺二間の陋屋を湯島の妻戀

坂に構へて談笑園諒滑稽道場お詵案文認所と云ふ招牌を出した位貧乏の極致に居つた男であつたが、漠然時勢の推移を感知して、文章を殆んど全部假名で書いて、極端に読みやすくしてしまつた。おそらく日本の文學史中此の位低級な俗受なものを書いたのは有るまい。

英國思想の影響

明治初年の西洋崇拜は今からは到底想像し得られぬ。漢字全廢論が起り、羅馬字採用論が起り、福澤の慶應義塾も中村正直の同人社も新島讓の同志社も一圖に西洋化を説いた。中にも福澤の英國思想を、功利説の一點に集めて開國進取を唱導した勢は素晴らしいもの、その著書の『西洋時情』が二十五萬部賣れたと云ふのは、今から顧みても出版界の奇蹟だ。此の極端な歐化主義が幾分でも小説の著作に彰れたと云ふのは、たゞ假名垣魯文が一人あるだけ、鶴亭秀賀も山々亭有人も柳水亭種清も笠亭仙果も二代目春水も皆徳川文學の殘膏ちんかうを舐ねぶつたばかりと云ひ捨て、差しつかへない。

西洋道
中膝栗毛

さて、魯文の『萬國航海西洋道中膝栗毛』は神田の蕩兒彌次郎兵衛北八の二人がロンドンに遊ぼうと思つて、横濱の豪商大腹屋に伴はれて行つたもの、無論此の作者の態度は新時代の要求に應ずると云ふやうなことは無く、たゞ「此の節の西洋ばやりへつけこんで目先の變つた趣向」を凝したまでである。無論魯文は當時流行の福澤諭吉の西洋事情で、西洋旅行の大體に見當をつけ、岡文紀の翻譯書とか、巴里博覽會を見物して歸つた宮田砂燕などから實話を聽いていゝ加減に想像で所謂デツチあげた作品である。

彌次「さつき通さんが讀だ番附の様子じやア博覽會は餘程不思議なものがあゝるに違ひねへどうだらう己ら達も何か持出して洋人を驚し付けてやりてへが早速いゝ工夫もねえのウ 喜多「いゝな其品を見せねへからツても評判をさして是ゝゝのものが日本にあるといつて新聞にでも書いてやらうじやアねへか茲の亭主は横濱に長く居たんで、日本言葉には大概わかると通さん

が云たッけが丁度いゝ兩人で主人に應接していゝ加減なごまかしを吹て遣らうじやねへか夫がよからうと兩人にて主人に用事あるゆる對面したしといひ込みたれば取次の夷人早速に主人にかくと通じたれば何事やらんと席に通し客人の事なれば町寧のあいさつにて英人「アイシイユウホルストタイムアイアムウヘリヲフライジツトホールユールワステーイングインデヌタイム」兩人「私達はまだ洋語を知りやせん

西洋道中藤栗毛十三編下

などの引例にもある通り怪しげな英語交りの言文一致で頻りに書きなぐつたものにすぎず同じ書の十一篇の序に

方今文明開化一時に進み余輩僥倖に學ばざる子曰の迂遠を去り、經驗窮理の洋風に傾き市街の兒童等に至るまで芥子坊主の支那頭を殘截の歐羅巴流

に一變し孔氏の遺書はベケにして英字、佛の横文エビシ、四百餘州は何のその萬國世界五大洲天地の理を知る開端に至るはめでたき御代に新玉の春を待ち得たる心地になん。而して廢藩舊知事の公達子も無僕獨歩に世間を見知り歸農の扶持は飛鳥川水に流して商法開業父母在せども遠く遊び艦砲一發三千里且に道を聽くとも夕に死するを可なりとせず。牛を食しビールを飲み體を壯健にして壽を保ち利を得て國を富ますを以つて今日も報恩とす

とあるはその内容において皮相文明の根柢の更に無いグラ〜と動搖ばかりして居る混沌状態を語つて居るものである。その文體においても極めて鶻的であるが、此の混沌と鶻的が魯文が有する徳川明治兩文學干繋

鶻的
な
文體

の唯一の價值である。魯文の作だけには時代の影響が全然皮相的ながらもよく彰はれて居る。尙ほ當時の面白い現象は同じ作者の『胡瓜扱』であつて即ち福澤

胡瓜
扱

諭吉翁の『窮理圖解』の廣く讀まれるのを狙つて、その『普通を假用し
實學有益の確論を無用の戲編に翻譯せる』ものその一例をあげると

第四章 風の事

吹よ川風揚れよ籬れ、中の歌妓の程の能さ、三弦の絲の柳橋。四時の盛り
も取り別て、夏來にけらし白妙の、肌をすきやの衣手に、嬋娟とすました
左襖。箱持が供に立姿。

とあるは福翁の風の説明を模し、「空氣日に照らさるれば熱して昇り冷氣これ
に交代して風のもととなる」理を歌妓の生活にあてたものである。古來此の種
の模擬文學の例はすくなくないが明治の維新當時福澤諭吉の通俗文體が時文と
して、非常に勢力を持つて居たに比べ、小説壇が何ら新味な文體を持たなかつ
たのであるから、此の胡瓜扱一篇が、當時の讀書界に一種小説の新文體新構造
を想はせる一つの縁となつたものとして記念すべきである。尙ほ福澤諭吉に就

福翁の
小説

いて記憶すべきは、彼に只一篇アレゴリーの小説『かたわ娘』がある事だ。『かたわ娘』は生れながらに齒の黒い眉毛の無い女兒が、かたわと近所のものに罵られながらも成長して縁づいて見ると日本の舊風俗では反對に美人になつたと云ふ筋であるが、その文章が例の福澤一流の些の澁滯のない率直な點で馬琴調などとは遙かに飛び離れて新味なものである。

はや十四歳の春に至り、初花のつぼみもほつるゝ時節、たちゐふるまいとやさしくあいきやうもこぼるるばかりの娘盛りなれど、たゞいかにせん齒と眉毛となり近所の人々も今はこれを見のがしにせず、竊に指さし噂して文盲連の口々に彼の娘の眉毛はいづれも癩病の筋に相違もあるまじ憐れむべし玉の顔色も近き内に形を失はん、その癩病は兎も角もかの齒の色は怪むべきなり。あの家はいかなる前世の宿業ありて斯る稀代のかたわものを生みしや親は代々たどん商賣くろいたどんを高く賣りしろい飯を喰ひし

報かさなくばここに又説あり。あの親達はかねもちなれども近處の人が借金カネの斷りに行きしときいつもふくれつらして白い齒を見せたる事なきその因果にて黒い齒の娘生みならむなどとてほうだいに嘲り笑ふもあり。

など今の眼を以つてすればともかく、當時の時文と云へば一から十まで一齊點の訓讀をそのまゝ假名交り文にしたもののなかに、福翁の此の一篇は輝いた他山の石であつたと云ねばならぬ。

砕けた
漢文

所謂小説と云ふ部類には這入らぬかも知らぬが、明治十年前における成島柳北の砕けた文學は魯文と共に忘れてはならぬ。柳北は漢文家であつたが爲に、その文體において小説壇において記すべきものは無いが、彼が明治七年發行した『柳橋新誌』と明治十年に發行した『花月新誌』とはともに漢文ではあるが今日から見れば發賣禁止になる様な淫靡な文字まで書きつらねてある此の雜誌、及び撫松の『東京新誌』(明治九年四月發行)は當時魯文一輩の小

説を下層社會の下司者が讀む戯作などと云つて、頭から手にも觸れなかつた所謂智識階級の人々にとつて、丁度今日の小説のやうな讀み物となつて提供されて居たのである。

言文一
致の萌
芽

尙ほ此の時代において言文一致の萌芽、萌芽と云ふにもまだ足らぬほどの運動があつた。それは假名垣魯文が假名で小説を書いたやうな意味、つまり成るべく平易にしようとする努力である。それを強く深く意識した上でやつたのは福地源一郎であつた。福地源一郎の言文一致主張の目的は全然平易に判りやすくすると云ふのであつて、後に起つた山田美妙や長谷川二葉亭やなどが美術品としての言文一致即ち表現法からの適否で論じた運動とは全然根柢を異にして居る。福地は日々新聞の紙上で嘗つて文章平易の主張からこれからは農夫のかく借金の催促をする文章などは『借金はなせ越さぬ。越さぬならおれが行く。おれが腕には骨がある』と書く、それを當時諸諺家の巨擘であ

つた成島柳北が『朝野』紙上に評して先生何ぞ「國會はなせ立てぬ。立てぬならおれが書く。おれの筆には骨がある」とは書かざるやと抑揄つた事がある。此の文章の平易から例のとさ文體と云ふものが起つた。それは平易な文章を書いて一番終りにとさとつけて噂のやうに書くことであつて明治十年に起つた有名な『圓々珍聞』などはみなこのとさ文體で行つたのであつた。

とさ文體

○近頃は頻に秋葉さん近邊が焼ますので其邊の人が社内の人に向ひ餘りつまら無いじやねへか鎮火の神の地内から火事をオツ始めるは夫がサ此間秋葉さんから神主さんへお勅には近年坊主に計り肉食妻帯を許して神佛には構はねへから己も少は焼いても宜はと言聞しましたとき 圓々珍聞

翻譯の

二派

要するに此の時代においては小説と云ふものは嚴密な意味でなかつたのであつて、種彦春水の流れを其の儘套襲したものはあつたけれども新らしく起つたものは皆無である。文體に最も大なる影響を與へたものは翻

譯であつて、翻譯には福澤諭吉と中村正直との二派が最も著しい特色をなして居た。福澤派は平易を主眼とし中村派は嚴正を主眼とした。一つは原文を離れやうとし、一つは原文に即しやうとしたのである。一つは平假名を用ひ一つは片假名を用ひた。そして此の兩方とも殆んど完全を以つてゆるされる程に發達したのは、二家の識見の高かつたのを證する。兩方の例をあげると次の如くである。

世の中に、かえる。^{ムシ}でゝむし。はい。いもむしなどいふ虫あり罪もなきものなるに心なき人は見付次第にこれを苦しめこれを殺すことあれども以ての外の事なり（福澤翁童蒙教草の一節原書は英人チャンプアル著モラルカラツスブックの翻譯）

瓦德^{ワット} 幼年^{コウネン}ノ時戲玩^{モテアソビ}ノ具ヲ作ルコト巧ナリケリ」ソノ父ハ木工^{コウイク}ニシテソノ舖^{クフドランク}ニ象眼儀^{クフドランク}アリケルガコレニ因リテ生物體質^{バイジヨロク}ノ學（或ハ生命ノ理學ト譯ス）ニ心ヲ留メソノ深奥^{オカキ}ニ達セリ（中村正直譯西國立志篇ノ一節）

第二章 翻譯文の勃興（明治二十年まで）

『繫思譚』——『もしや紳紙』——才子佳人の奇遇——逍遙の翻譯——翻譯文學の新生面——周密文體——ジニールベルヌの小説——口譯——東海散史——鑿庭篋村——禁短氣——ユーモリスト——『三筋町の通人』——鳴鶴と鐵腸——言文一致の意義

亂譯の時代

『花柳春話』の出た明治十年から、二葉亭四迷の『浮雲』が出る明治二十年までの日本の小説壇は、日本の文壇に創作力が缺如して居たかと思はれるほど翻譯ばかりが世に出た時代である。藤田鳴鶴の『繫思譚』等は翻譯小説史の上で重きをなすものであるが、井上勤の『六萬英里海底旅行』など佛國の科學小説家デュールベルヌの、空想的な驚嘆的なものが頻りに翻譯された。同時にまた此の時代に英國文壇の根柢をなした大抵の基礎的作品が不完全ながら邦譯された。例へばアラビアンナイトは『全世界一大奇書』の名のもとに明治十

八年出版され(井上勤譯、鷺塚曙回島記は即ちガリバーヌツラベル明治十三年に出版された(片山平三郎譯)のはその一例であつてユートピヤを譯した良政府談及び刺世拉斯傳なども此の頃廣く讀まれた。當時の翻譯の傾向をあげると

(一) 文明開化を狂熱的に憧憬した點で一種科學上の驚異にうたれやうとしたもの即ちベルヌの翻譯の如きもの。

(二) 政事的興味あるものにて政治小説とは云ひながらも譯者の立場から云へば時代思想に應じ之を導かむとする見地より純文學の態度を以てせるものリットンヂスレライの翻譯は之れである。

(三) は(二)の傾向を極端に走らせたもので憲法翹望時代に民權主張の結果爆裂彈式なものの宮崎夢柳小室案外堂等の『鬼啾々』『夢戀々』『自由の凱歌』『西洋血潮の荒波』などが此の例であつて、佛國革命又は露國虛無の反亂を材として露骨に自由民權を寓意して居る。

(四) 純粹な興味での文學もの例せばスコットのアイバンホーを梅蓄餘黨としたり
その他ゲーテの『狐の裁判』などがある。

(例)

志氣凜然と程もなくピロウカミルデモルラン等は、バスチールの方へ近づきし折柄その横手に當りてブルバートと云へる街衢ちまたの中央より思ひも寄らず忽然と鼓の聲天地に響き現はれ出し一彪の軍馬スハ敵の我れに先だち寄せ來りしこそ健氣なれ花々しき手始めの戦ひなし革命黨が手並の程を見せ呉れんと急に隊伍を立直し今や遅しと控へし所ろ是は全く敵にあらず巴里の護衛兵の政府に負き人民を援けん爲め此處まで來りしものなるにぞ革命黨は愈々之れに勇氣を増しドット揚げたる鯨波の聲揉もみに揉んで進みつゝバスチールを距る大凡そ二丁ばかりの土地に陣を張り敵の虚實を望み見る向ふの方は石壁鐵柵後には嵯峨そたる山高く雲に聳そひ………

ザニーマ作宮崎夢柳譯自由の凱歌の一節

誇張し
た文體

此の時代の文體の特色を云へば明瞭に誇張と云ふ點が目につく。如何なるものでもエキザゼレートしてある。これは其時勢相が無暗矢鱈に西歐の物質文明に驚き同時にそれを輸入して年一年我が國の社會の面目が進步する所謂文字通りの日進月歩であつて、來年さらい年頃には此の島國が什麼に進步するか想像がつかぬ。丁度市區改正前の町家のやうにすこしも落ちつきがない。未來は什麼に眩い程進步するかと思つて未來記など頻りに出る

未來記
流行

末廣鐵腸の『二十三年未來記』明治四十年の日本「巖本善治の『女の未來』」などを始め澤山ある。小説の舞臺も大抵非常な未來か過去か遠國かを舞臺にした者であつて、『雪中梅』『花間鶯』など現在のとをかくにも尙ほ百年後の未來から願みて書くと云ふ有様、所謂櫻痴翁のもしやもしやで『もしや草紙』をかき明治三十五六年には上野の公園が無くなつて大厦高樓で埋つてしまふなどと

誇大的に想像した時代である。だから小説の主人公も極端に類型になつて、必ず才子佳人の奇遇でなければならぬ。リットンの小説などどれも翻譯されて見ると主人公は才子佳人になつて居る。

だからその翻譯でも原文を誇張してある處が多い。當時元作者の本意を汲むで翻譯せねばならぬと序文に主張した坪内逍遙さへ尙ほその弊の甚だしいものがある。例へばリットンの *Kienzi* を譯して『開卷悲憤慨世士傳』と題した一節に(明治十七年)

云ふは正しく穗に出て。しらせまほしき尾花艸、招き顔なる言葉に思ひは
同じ愛蓮がさと頼うせし我が顔を、かくすは袖の夕霞もれでる月か花の貌
や、擡げつゝ且いふやう「數ならぬ身をさほどまで

とあるのはその原文が

Blushing again, but with far different emotions than before, Irene, after

a momentary pause, replied, "Yet, my lord, I must consider....."

である。此の譯者にして既に是の有様であるから他は推して知るべしである。

同じリットン卿の小説を譯しても織田純一郎の『花柳春話』と鳴鶴藤田茂吉の『繫思談』とは餘程譯者としての立脚點を異にして居る。『花柳春話』は明治十二年の出版で『繫思談』の方は其れから七年おくれて明治十八年世に出たのであるが、此の二つの翻譯に彰れた譯者の態度の相異は、我が翻譯小説の變遷上から見て重大な意義があり、『繫思談』は此の意義ある峠を越して日本の翻譯文學に一生面を開いたものである。

翻譯文學に一生面

『繫思談』は普通世間では藤田鳴鶴の譯となつて居るけれども實は尾崎庸夫の譯であつて鳴鶴はその序者であり校閲者であり佐譯纂評者である。

『花柳春話』の文體は全然馬琴調であつてひたすら俗耳にいりやすく努めたも

の、譯述者織田純一郎が

舊譯は漢文體にして婦女兒童の或は解し難き所なしとせず且舊時は婦女兒童にして英史を読む者多からずと雖も今は則ち教育の道大に進み其の史を読むこと殆んど成童男子に異らず故に今其の舊文を一變して苟も四十八字を読み得るの徒は之を読むで解せざるの憾なからしめ以つて啓蒙英史の風俗篇に充みんとす

と云つた通りその一例を示せば

花は散り霞がくれを行く雁の影に春暮てかたみに殘すものとは青葉がくれに宿かりて昨日を謠ふ鶯うぐいす兒の聲より外に跡もなし然れども人情熱を去り冷に歸するの理とて春の後のちなる夏景色は亦一層の詠なり然ればクレープランドは多くの客を招待して其の別業に滯留せしめ今日山行明日は又船遊とて……………

『花柳春話』第五十章

の如きである。當時はもとより誤譯問題などを八ヶ釜敷云ふものは一人も無い、渴いた塵が水を求めるやうに西洋小説を憧憬れた風潮は忽ち此の『花柳春話』一篇が洛陽の紙價を高からしめてしまつたのであつた。織田純一郎の翻譯はもとより奔放自在なものであつて誤譯飛譯一さい介意することなく、讀過の情緒を誘つて讀者を魅し易すいやうな箇所になるとドンドン自己獨特の例の馬琴調の美辭麗句を阿呆陀羅經式に書きくはへたものであつた。譯ではなくて原書の構想を種たにして旺に自家の創作慾を充たして居たのである。

けれども斯様な亂調子の翻譯は何時迄續く可きものではない。果然尾崎庸夫の『繁思談』は『花柳春話』とは直反對の傾向に出たのであつた。繁思談の原書名は Kenelm Chillingly : his adventures and opinions であつて、『繁思』の二字は特

態密な

に其邦音が冠字 KC の二字の英音と相近いに因つたのである。

尾崎庸夫は織田純一郎等の妄譯以上に亂暴なる極端に反對して立つた

『繫思談』の序文において堂々と

稗史は文の美術に屬せるものなるが故に構案と文辭と相待て其妙を見るべきものなる事論を待たざるに世の譯家多くは其構案のみを取りて之を表發するの文辭に於ては絶て心を用ゐる事なし全く原文の真相を失ふも肯て顧みざるは東西言語文章の同じからざるにも因るべしとは雖も美術の文を譯するの本意を亡失せる事之より甚しきは無し譯者竊に茲に慨する事あり相謀つて一種の譯文體を創意し語格の許さん限りは務めて原文の形貌面目を存せん事を期しこれが爲めには瑣末に涉れる邦文の法度の如きは寧ろ之を破るも肯て顧みる所に非ず精緻の思想を叙述するに方り往々已むべからざるものあればなり英賢カーライル氏の獨逸大家ギエーテ氏の書を譯するや殆ど其一字一句を増損せず譯文既に成て精彩原文に減する事なし論者いへるありカーライル誠に善くギエーテを譯せり但未だ之を英文にする事能は

ざるのみと抑我の英と語脈の源流發達の程度固より甚だ相懸殊せること英獨兩語の其本宗を同ふし其の進度を均ふするが如きに非ず故は原文の語句を増損せざるが如きは得て能くすべきの事に非ず而して之を邦文にする能はざるの病は亦從て多からざるを得ず譯者がカーライルの心を以つて心となさん事西施の顰に倣へるよりも猶甚しきは其自認する所なり然れども既に自ら創意といふ舊格を以て新體を論じ之を邦文に非ずといふものあるも固よりその嘲を甘受せんとす。

と論じて居るのは慥に卓見である。只に文體ばかりでなく、其の中に用ゐた挿繪の如きも『花柳春話』の明治初年の風俗畫の様な洋服姿を無暗に並べたのと異り、特に原書通りに佛人ビゴアの挿畫を佛國美郷畫と銘うつて挿入し、漢英對譯李頤侯小傳名稱備考を添へ、M.A.とB.A.との區別を學士と得業士となす程に嚴密に取扱ひ、頭註及び一章終る頃に總評として依田學海森田思軒藤田鳴

鶴等の漢文評を添へ最も嚴正な態度を以つてしたのであつた。けれどもその譯文としての價值は甚だしく俚耳に遠く丁度科學書に對するやうに窮屈である。

ケネルムは累代培養せし樹林の下蔭に傍ふて我家へと返りたるが其路は一面青草にて潺々たる溪流其側を通過し今しも別れし吟客がたどり行ける塵埃滿眼の大路に比すれば瀟灑清灑同日の談に非ず之を行く者の心も自ら平靜に歸するなるべし去れども想像の内に充ちたる人に在ては別に自家の景致を胸中に生じ自家の青天を腦裡に畫くことならむ

『繫思談 第一篇第十五章の一節』

の如きは譯者の所謂創意せる日本文としては寧ろ退歩と云はねばならぬ。尙ほ當時の翻譯については坪内逍遙の『書生氣質』にある次ぎのやうな一節が一つの參考ともならう。

(繼)そいつは我輩の願ふ所だ親父の供給が絶えてからは我輩も實に究したから何か金儲をしなくては。下宿の拂もできやしない早速周旋してくれたまへ。それじやア今朝つからやつて居るのは。即ち其 Translation [翻譯] か(山)さうヨ。見たまへ雜と如斯體裁さ(繼)どれ〜ト言ひながら山村譯しかけたる原稿をとつて見る(繼)ヤア随分亂暴な翻譯だな。エトなんだ：是ニ因テ之ヲ觀レバ陪審裁判トイフ制度ノ因テ以テ原因セシ所以ノ道理ハ。蓋シ遠隔ナルサキソン時代ノ王政ノ頃ニアリシヤ。決シテ疑フ可キ事ニ非ラサルナリト余輩ガ信ゼザルヲ得ズト斷言セザル可ラザル事トイフ可シ：ハ、ハ、ハ、イヤニ冗長な曲りくねツた變に讀悪い文章だなア。羊の腸よろしくたア如斯文體をいふんだらう就中「因テ以テ原因セシ所以ノ道理」なんざア實に重複極るじやアないか。ナゼこんなに文を延すんだらう反語ばかりいやに重なつて。惡讀くツて解りにく〜ツて是じやア素人にやア解

周
密
文
體

りやアしないせ(山)ハ、ハ、ハ、ハ、ぶつゝけがきだものを。文はどうせ無茶苦茶さ。しかし長くしたは此方の策さ。反語を澤山つかつたり。同じ事を繰返して居りやヤ。骨がちつとも折れないで以て直に一枚だけ出来るだらう。何々せずんばあるべからざるなりと歎。それ然り豈それ然らんやなどゝやつて居ると。十行二十字は二十分位に一枚かけツちまふ。是之を economy of labour [ほねほりの儉約] といふ(繼)ヤレ〜斯いふ翻譯者の手に成た。翻譯書を買ふ奴は可憫だ。しかし我輩も其法でやらかそう。二三枚原書の散亂になつたのを貸たまへ(山)ヲット承知だ。それじやアページ。トエンチー [二十葉] から〇かうツト〇ページ。サルチー [三十葉] まで、君にやろう。汗牛堂へは明後日ゆくからなるべくせいでして譯したまへ。十枚で二圓五十錢にやアなるから(書生氣質)

『花柳春話』から『繫思談』に遷る翻譯上の意義については森田思軒が

我邦小説の趨向將に一變せむとするや織田氏譯する所の『花柳春話』之が嚆矢をなせり。而して是れ實にリットン氏の『マルトラバース』なり而後西洋小説の我邦に譯さるるもの紛然群起せり然れども其の文體は率ね東洋の舊に仍りて未だ生面を其間に開くものあらず。藤田氏の『繁思談』を譯するに及て造句措辭別に一機軸を出だし或は難○與○に○通○じ○難○き○もの○無○き○に○非○ず○と雖も其の原本を臨する謹嚴精微今日無數の周密文體はその紀文を此に遡求せざるを得ず

と云つて居る此れは思軒が明治二十二年秋の感想であるが思軒の所謂周密文體なるものは即ち新しい酒が古い革袋には盛りきれなくなつて出來あがつた急場の鶴的なるもの、當時英國のピクトリア朝時代文學全盛の心理解剖の傾向が、我が維新このかた雜駁と疎笨とを特色に荒みきつた文壇に影響して來て、まるで強飯の膳に胡鹽鹽の代りにスープが出された體たらしく、大狼狽きに狼狽いだ

突差の思案に斯うもしたら落ち着いたらしく雅かに見えるだらうかと思案した
あげく生れたのが、所謂周密文體である。しかし此の文體はともかくも歐文に
彰れた感味を傳へやうとするのが第一の眼目であつて、假令氣分を移さうのな
どと云ふ程度までも行かなかつたにしても、歐文の語跡文脈に獨特な關係代名
詞の微妙な用ゐる方を何う云ふ風に譯したらいゝだらうかと思案にくれた跡が
『繫思談』のいたる所に彰れて居る。その他イヂオムから來て居る行間の意味を
どうしやうかと工夫した跡もあるが、要するにまだ文法上語學上の感味を移さ
うと云ふ點にとゞまつて居て、内容上思想上の氣分を出さうと云ふ點には微塵
も氣が付いて居らぬ。殊にその會活の如きものは甚だしくたとへば生れたばか
りの幼兒の病的な沈鬱な顔を見て女が驚いて

如何なる天上愁人の顔色ぞ其の神仙を離れたるを悲めるにや
と叫ぶ言葉など最も周密文體の悪い方面の特色を發揮したものだ。

ジュール
ベルヌ

しかしともかくも『花柳春話』と『繫思談』とが導火で盛に翻譯が出て、

二十年二十一年はその全盛期であつた。磯野徳三郎譯『ハロルド物語』

(リットン)牛山良助意譯『梅蕾餘薫』(スコット)井上勤譯『狐の裁判』(ゲーテ)大

石高德意譯『花情粹話』(伊、ピトリオーベルセジオー)愛花仙史意譯『悲風慘雨』

(英、ウキリヤム、ハリソン、エインスウオルス)中村柳塢譯『歐洲情話』(佛、セ

ルバント)大石高德譯『奇遇魯國美譚』(佛、トンベイ)等玉石無數である。が中に

特記すべきは佛の科學的驚嘆的小説家ジュールベルヌの作品を數多紹介した事

であつて、『六萬英里海底紀行』『亞非利加内地三十五日間空中旅行』『學術妙用

造物者驚愕試驗』等は、我が文壇の翻譯小説史から云へば後に影響のなかつた

傍系的な慧星のなものであつたが、多く人に讀まれ特種な西洋趣味を鼓吹した

點で忘れてはならぬ。元來、ジュールベルヌの小説は明治十三年川島忠之助が

『新説八十日間世界一周』を譯したに創まり井上勤以外に『鐵世界』(紅荷園主人

譯『萬里絕域北極旅行』(福田直彦譯)などがある。是らは後の黒岩涙香の『巖窟王』などの趣味の上流と見るべく翻譯の風潮が必ず伴つて連れてくる外國的な新ロマンスの發現した趣味である。

口譯の

始まり

さて翻譯の文體は所謂周密文體で妙にバタ臭いヨジレたものになつたが茲に一つ注意せねばならぬは明治二十二年後半から翌年にかけて益田克徳が毎月二回十二冊完結でリットンリットンの小説『夜と朝』を譯した事である。益田克徳の譯は周密文體でも何でも無い。講談口調に口譯をしたのである。若林珮藏が得意の速記術でひたすら流麗巧妙な吻氣語勢を寫さうとしたのであるが、無意識ながら一種進歩した言文一致體になつて居て面白い。試に今その書き出しの數行を引いて見ると、

英國の都會倫敦ロンドンに程遠からぬ或村のお寺カクレに迦靈カクレといふ坊ぼうさんが居りました。勿論村のことですから別にたいした御宗旨の學問のある人が入用と云

ふ事もなし又智識知尙ちしきしやうさんが住職になる譯もありません。

と云つた調子である。もとより『繫思談』翻譯振の反動であつて、一寸福澤論吉の文章の意氣で小説壇に出たと云ふ風だ。

井上勤

尙ほ翻譯に就いて比較的忠實であつたのは當時から直譯風であると云はれただけに井上勤の翻譯であつて、例せば

斯クテ本船ニ歸リ來レド寂然トシテ人影ナク夕日ノ光イト幽カニ海ノ面ヲ照シツツ晚鳥倦ンデ埒ニ歸リ寄ツテハ返ス仇浪ノ岩ニ當リテ碎クルノミ暮色ニ暗愁あはれヲ催シ故郷ヲ思ツテ歸思ヲ惹ク事切ナリ頓ガテ小舟ニ積來リシ菓物ナドヲ移シ運ビテ事漸クニ果テシカバ小舟ヲ本船ニ繋ギ置キ己レガ部屋ニ歸リ來ルニ晚餐ノ準備調ヒ居ケレバ直様食事ヲ做シ果テツ晝ハ疲ノ強キモノカシ共ニ臥戸ニ入相ノ水夫カ打鐘數ヘツ、手足自由ニ蹈伸シ眠ルトモナク眠リタリ。

井上勤譯 『海底旅行』第二十四ノ一節

の様な一體であつて、是を前にしては明治七年に出た上條信の『開化新歩後世夢物語』、是を後にしては明治三十年に出た尾崎行雄の『一讀三嘆』(マクスオーレルのジョンブルエンドヒスアイランドの譯)と共に中村正直の『西國立志篇』あたりから系統を引いた翻譯の一體である。それを創作にしては藤田茂吉の『文明東漸史』に高潮をしめして居る文體だ。又創作で柴四郎の『佳人の奇遇』は讀むで面白く文章の巧妙な爽快な點では當時比類がなかつた。

時に金鳥既に西岳に沈み新月樹にあり。夜道朦朧なり。少焉ありて、皓彩庭を照し、清光戸に入る。幽蘭靜に起ち、窓を開て曰く、光景晝くが如し郎君幸臨す、欄外風清花香人を襲ふ。良夜空く度り難く、盛會再び期すべからず。徒に相對泣する亦何の益かあらむや。氣を鼓し勇を奮ひ、歌舞吟咏自ら寛にすべしと、顧みて紅蓮に謂つて曰く汝小琴を奏せよ。我は大琴を彈せんと

『佳人の奇遇』の一節

駛空船會社

余高堂の傍に到れば駛空船會と書せられし大招牌を掲げたるを見る。何れの場所より駛空船の出立するやこれを視認めんとせしに其所を知らず只人家稠密なる中にあるを以つて大に驚目せり蓋しこれ手券テガタを受るのみの役員ならんと思へり然りと雖も尙近寄りて之れを見るに他の屋宇に異なる所あり其の屋上平坦にして恰も舟の如きものを保てり精密に之を知らむと欲するも衢上を掩ひたる玻璃の爲めに遮られて熟視すること能はざさりし

上條信次の『開化進歩後世夢物語』の一節

英國の貴女は好んで螻首しんしゆを現はし足さへ覆おほへば裸體と爲るも尙ほ之を耻ざる可し。實に英人の足を人に見らるる事を忌むは支那にもをさく劣らぬほどにして黒色の泥濘道を填むる所を通過するにも決して裳かぶを褻かぶげて、其足を現はすが如きことなく寧ろ泥濘の腰部に及ぶを好む者の如し。

饗庭 篁村

かう云ふ亂譯時代を通じて茲にたゞひとつ砂漠のなかの金剛石のやうに翻譯熱にはすこしも犯されずに輝いたのは饗庭篁村である。もとより篁村の全盛は是の時代よりも後に屬して居るが、その集『むら竹』の前半に收めてあるものは實に此の時代の産物であつて、此を後世の文學史家の觀察眼のもとに置くならば、寧ろ篁村の價値は、此の亂譯時代に世をあげて西洋熱にかされたのに反し獨り徳川文學を繼紹し之れを幾分か明治化した點に輝いて居るのであらう。

篁村は明治の春水(二世染崎)魁雷、應賀、魯文等と相隨した一操觚者に過ぎなかつたが當時の所謂戯作者が八犬傳、梅曆、八笑人の餘唾を舐る外に一步を出られなかつたが、彼れ一人だけは深く西鶴其碩以下の諸作を涉獵し、元祿前後の隨筆小説に塾し江島屋の文脈を傳へ得た故遂に紅葉露伴等の元祿文學の復興

に際して、篁村宗とまで云はるゝ程自家の特色を發揮することが出來たのである。

篁村は淡島寒月等が西鶴を傳へたに對し、寧ろ其積を傳へたもので、一部の社會からは篁村は「明治の其積」だと云はれて居る。

篁村の
禁短氣

篁村は文章に就いてよく禁短氣と云ふ事を云つた。其積は實にその禁短氣の開山であつて筆法は鋭利な方であるが同時に談諧的な諷刺家たるの素質がある。恐らく明治文壇で一番初めのユモリストとしては篁村を推さねばならぬ。内田不知庵は篁村をユーモリストとし英國のアヂソン及びスキフトと比較して後

是等の作を一々數へ來れば明治の諷刺家の隨一と推さるる篁村氏も亦一步を讓るべし。余は明かに忌憚なく直言す。篁村氏の作には讀んで眼底に涙を催ふし來るものを見ず又極めて冷酷に根強く人間を痛罵せしものあるを

知らず。又人間の最も美しき側面若しくは其の理想世界を描出せしものあるを見ず。篁村の開山祖師は畢竟三筋町の通人先生に過ぎざるなり。

と云つて居る。もとより其積からスキフトやアヂソンが出て來さうな筈も無いからそれは別問題としても、明治十四五年の頃から、讀賣新聞紙上に、籠泉居士大阿居士の名を以て流麗輕快の筆を絶たゝず、讀賣新聞が高尙に過ぎず野卑に流れず上下を通じて當時聲價のあつたのは彼の功績であつて、歐化熱のなかに孤城を衛つたものと云はねばならぬ。

最初の
ユーモ
リスト

しかし篁村は何處までも徳川趣味であつて自分でも好きなものは「内證で勸懲主義」など云つた位であるから、たより反例その描く人物が洋服眼鏡でも之を説明して「今時の若い者には似ぬ内氣の性質にて好む事として算術は和洋とも能く出來讀書もまた中等の教育は十分に受け狂齊翁に模本を貰ひて器用に書さへかくばかり揃ひし上に色白の優方なれば」とか「男振よく仁心ありて

學問好き沈みたる氣質ならねど浮歌舞伎でなく道樂といふも茶の湯俳諧父が外出の時は帳場格子の中にて麻靡しびれをきらさず父が店にある時は折々の氣延し」などと云ふ癖が著しくある。試に篁村の軽いユーモアとサラサラした處を例に引くと

石榴せきりゅうはポント漆をはたいて其手で煙草入を抜きトキニと云ふをキツカケに、音のする角彫の筒より早いを自慢が脂止めの烟管をとり出しソレ君も御承知のと云ひかけて手烘りの火鉢を引寄せ例の隠れ家へねで切つて煙草を吸ひ附け火鉢の縁をトント叩いてドウモ君に見せたい嬋娟窈窕たるものが顯はれやした實にお目に掛けたいと云つて羽織の紐を結び直す真似をしてわざと跡を言はずに澄し切つていふ 『三筋町の通人』の一節

文明東
漸史そ
の他

篁村の純文藝的努力と翻譯風潮の間を綴つてよく當時の社會に觸れたものは矢野龍溪の『經國美談』と藤田鳴鶴の『文明東漸史』と末廣鐵腸の諸作である。そのうちで末廣の諸作は最も時勢に適應したものであつて、政治小説として此の位廣く讀まれたものは實に空前絶後である。彼の小説『雪中梅』と『花間鶯』の二作は此の時代を記念する絶好のものである。

雪中梅

雪中梅の文は餘程現代の小説に近いが何分にもその基調が漢文にあるから、漢詩など引いて形容し文意を高潮させやうとした跡が澤山ある

例せば

小女は枕上にて悄然と物思はしげの顔付なるが色は白雪を敷き鼻筋通り眉秀で眼中も冷かにして何處となく愛嬌あり數日前に結びしと思はるる島田鬢は少しく亂れて黒髮面に垂れ母の寝顔を窺ひてバラバラと涙を落し手巾にて之を拭ふ有様は梨花一枝春帶雨の風情なり始くあつて老母はコンコン

咳をして目を開き「オやお春はまだ其處そこに居るかハツイウトウトと睡つた

内にまた御父さんの夢を見たがなんぞ浮言でも云ひはせなんだか……

等のごときである、地の文が全然文章體であるのに反して會話だけが言文一致なのは此の頃から初まつてずつと後まで續いた所謂舊小説全體を通じた一つの特色であつて、是れが今日から見るときは非常に不調和なものであるが、しかし當時にあつては寧ろ作者の得意とする處であつて、丁度小説を讀むのは山國を旅行するやうなもの六ヶ敷い面倒な難解な峠をひとつ越してはだらだら坂を自然に足が前にのめて行くと云ふ様な緩急の度を以て讀者を娛ましめやうとしたのであつた。斯う云ふ特色のある文體は何が原因で出來あがつたかと云ふに恐らく當時の評家の所謂政事論の上に小説の粉を振り掛けしものなりとある通り七面倒な政治問題を平俗な文字に寓せやうと努めて來た事、更に云ひかへれば、作者には小説を書くこと云ふ仕事極めて卑俗な事に考へ

政治と
小説

られて居た時代であつて堂々と政事論をやるやうな見識のある男子が暫く身を小説家に窶やつして見ると云ふやうな態度があつたのであつた。當時尾崎行雄氏が政治家は亦新聞記者たらざる可からず亦道德家たらざる可からず亦學者著述家事業家たらざる可からず特に身を小説家に現じて錦心繡腸を鏡花水月の幻境に發露し以て大聲をして里耳に入り易からしむるが如きは今日我國の政治家たる者の最急方便なりとす

と云つたのは最もよく當事政治小説家の氣持を表はして居るでは無いか。『雪中梅』の版權免許になつたのが明治十九年七月七日であつて坪内逍遙氏の『小説真髓』が世に出たのよりは以前の事である。末廣鐵腸其の人にはさう云ふ「暫く小説家に身をやつして」と云ふ様な考へは無かつたにしても、さう云ふ氣分が多量に文壇に漾つて居たのであつた。硬軟程よく取り交せて俗耳にいり易くすると云ふ此の主意は、文體變遷の大勢から見て、文章體から言文一致に遷つて

行く大波濤の高まり高まつて遂に波頂に漸裂の白沫を碎く處であつた。鐵腸等が地の文の漢文直譯的から直に會話の平俗に遷る巧妙を一種文をやるの術として得意にして居た氣持はその當時の能文家の全部を通じた流行であつて、斯う云ふ風に會話と地の文章とに載然とした區別を立てて居た。

けれども茲にひとつ注意せねばならぬのは一方には之れと反對に地の文と會話とをうまく取り雜せて何處までが地で何處までが會話か一寸見わけがつかぬ様な一體のあつた事である。例せば坪内逍遙氏が明治二十三年の稿になる一圓紙幣と云ふ小説中に

さる程に女の子が件の路次を行きあたりて右へ曲らむとせし時に早口にき
いちやんきいちやんと呼びとめて左のかたより年頃十七八の娘の丈矮く肥
りて少し赤ら貌なるがかけ來りぬ前髪は式の如く剪さげて舞踏まがひに髪
の毛を高く束ね後毛ぼうくと風に吹かせ蝦茶色の毛糸のシヨウルを廣き

背一ぱいに被り泥濘のぬからぬ所を野馬臺の詩復讀中と云ふ鹽梅に新しき
駒下駄にて拾ひく走り來てきいちやん何處へ往ッていらッしやッたのけ
ふ山尾さんはゐましたか宅に、きいちやん新しき駒下駄に目をつけながら
ア、わたのよ、さうと言ひながらきいちんと並びンシテ御内儀さんもわた
の、きいちやん歩きながら仰きイ、エけふは朝からどこかへ出たの、さう
と言ながら並んで歩きながらきいちやんは感心だことネエ、なせ、よくお
使ひをなさるからさ、内職もするのおツかさんと一所に、さう感心だこと
ネエ、それから月琴も餘程あげたの、……………
と云ふやうな一節が試みられて居る。此の體は近松や西鶴やを始め多くあるこ
とで別に珍しい事でも何でも無いが、明治二十年前後に斯様な二つの傾向があ
つたと云ふのは、聽て後の作家に痛切に感ぜられるやうになつた地の文章と會
話との不調和と云ふ事を豫示して居るものと見られる。

小説を現在の様な純粹な言文一致にしてしまつたのは多く地と會話との不調和と云ふことに刺撃されて變遷したからであつて、後の時代の尾崎紅葉などは此の不調和をうまく綾あやなして行く才筆を持つて居たが、山田美妙川上眉山廣津柳浪徳田秋聲小栗風葉等は此の不調和を到底綾なし得られない醜惡に感じだして來たのであつた。

言文一致の意

明治二十五年以後に起つた小説壇の言文一致の運動を、或る人は小説を平易に読みやすくする爲めの運動と解するかも知れぬが其は間違ひである。文體を平易にしようとする努力はもつと以前に起つて居る。明治六年ローマ字採用論があつたり漢文全廢論が出たりした位であつて、事實の上から読み易い文章を書いた點において明治初年に世に現はれた福澤諭吉の文章ほど読み易いものは空前絶後である。今日の小説を読むよりも明治初年の文章である福澤全集を読む方が餘程氣が樂である。

小説壇の言文一致運動は決して平易にせむが爲めの努力では無い。もつと深い藝術上の根柢から動いて來て居るのである。其の點に就いて論究すれば、結局言文一致運動の意義とする所は小説壇に眞に描寫と云ふ一生面が開けて來たからである。描寫とは才筆の事ではない。能文の謂ひではない。言文一致運動以前の小説は才筆や能文やの小説であつたが言文一致運動以後の小説は描寫と云ふ立場に立つて居る。無論此の區別は明瞭には劃き得ない。明治の小説壇に眞に描寫の意義を解き始めたものは坪内逍遙氏の『小説真髓』であつたが、之を形の上に具體しやうとしたのが山田美妙等の言文一致運動であつて、消極的に平易に讀み易くするのでなくて、寧ろそれと反對に難解になつてもいゝから氣分の微妙を寫し、再現の目的を達しやうとしたのであつた。

*

*

*

*

尙ほ此の時代において直接小説の文體の變遷に關しては影響は無かつたが、

小説壇に安んじて詩壇に新運動が起つた事を忘れてはならぬ。即ち明治十五年五月外山、井上、矢田部の『新體詩抄』が現れた事であつて、在來の詩形を打破し一時にテニソン、沙翁、キングスレー、グレー等の詩を紹介し、人口に膾炙せしめた事である。

第三章 言文一致體の創始（明治三十二年まで）

馬琴調の破壊——四迷と美妙——雅俗——浮雲——『だ』と『てい』——文壇正倉院——『てあ
る』調——美妙と紅葉——雅俗折衷——書生氣質の文體——逍遙と鷗外——柳浪の言文一致
——撥聲小説——觀念小説——ローカルカラー——樋口一葉——郷土藝述論——翻譯——思
軒調——鷗外と三葉亭

馬琴調
の破壊
者

馬琴の文調の特色たる掛詞文字鏤りを以つて飾つた七五調はもとより
永く存在をゆるされなかつたものであらうが之を理論的に根柢から破
壊したものは山田美妙及び森鷗外である。殊に鷗外が明治二十二年一月『今の
諸家の小説論を讀みて』と題する論文で、小説と詩歌との區別を心理的に研究
した後、

余等は散文の音響を借らずして心を動かすものを以て、詩學上比較的純

なるものとなせり。此純なるものは十載の久き何れの國にてもかの狼然憂然たるものに掩はれたるが如き迹なきにあらず。故に余は近世に至りて散文詩の勃興せるを觀て、此純詩體の漸く將に暗黒裡より顯れんとするを喜ぶものなり。往時曲亭馬琴と云ふものあり。小説を以つて一時鳴り、之れに繼起するもの皆その武を追ひて還ることを知らず。然れども其の得意の文は純正なる散文にあらず美妙子の慧眼早くこれを看破したり。其の言に云く。文章と詩の眞の定義を、文章は節奏に因らずして物あるひは事を述ぶるもの詩は節奏に因りて物あるひは事を述ぶる者と定めこれを標準として馬琴生涯の文體の何れが眞を得たと問はゞ、前期の文却りて後期に優る。何故と言ふに、前期のは文章らしき流麗にて、後期のは歌らしき流麗なりと(新小説篇第七卷一回)洵に然り。馬琴が後年得意の文は殆ど全く七五の調ありて、韻こそ押さね、其一種の結語たるは掩ふべからず。今の小

説家は、其の文體は種々なるにもせよ、能く結語の小説を戀じて散文となしたり。亦た善からずや。

更に又

試に支那の文學を以て例となさん。その歴代の沿革を觀るに散文の體、六朝に至りて一變し、併四儷六の文となりて、其の純然たる散文の本體をば何時しかに遺失したり。如何といふに四六文は散文にあらず、結語なればなり。是れ豈馬琴の流麗と同じきものにあらずや。既にして昌黎等の崛起するありて、大に散文の復古を謀れり。是れ豈春の屋及其後繼者の作せる連動と等しきものにあらずや

と云つて居る。當時尙ほ俗耳には入ることが出來ず、したがつて一般の影響もさして大きなものはなかつた。けれども鷗外が我國にレッスングを紹介すると同時にそのラオコオン論をも輸入して、繪畫彫刻の差別などにつきても前人未

到な研究を發表して、識者間の文章に冥々の間に動搖を與へたのは忘れてならぬ事である。

吾人は明治二十年から三十年までの我が小説の文體の變遷に就いては、言文一致と云ふ事が最大の特色ある。その動脈をなして居る事を認めるのであるが、之れを議論の上に裏書きしたのは比較的すくない。たゞ茲に掲げた鷗外の詩歌散文の區別を比較的記念するに足りるものとする。要するに小説の文體が動搖に動搖を重ねて殆んど、停止しない有様であつて、明治二十八九年頃にいたるまで、小説も詩文もあまり變化が激しすぎて全く標準がわからなくなり、明治三十年になつては太陽記者(適天)は東京語を標準にせよと叫び、關根正直は文法の統一を、大西操山は『文學界の新事業』と題して現在使用して居る言葉の矛盾を解決する唯一策は只別に國語を製造するにある、之れが爲には日本の學者社會を網羅する會をこしらへて、三十年四十年の大計畫で新國語を決定せねば

ならぬと云ふ議論を吐いた。

さて斯くまで文體を攪亂させた導火の作物は何かと云ふと、勿論、明治二十年に出た二葉亭四迷の『浮雲』と翌年出版された山田美妙の『夏木立』である。

浮雲と
夏木立

『浮雲』は作者が日頃私淑して讀むだと云ふロシアのゴンチャロフの筆意を學んだもの、細微な描寫と云ひ、心理解剖の鋭利な點と云ひ明治四十年後に起つた自然主義の結果の作品と較べて殆んど大差の無いには驚く。

『浮雲』の明治文學史上における價値は各方面にわたつて偉大な影響のある點であつて、茲には詳しく論ずる事は出来ないが、其の文章と云ふ上から見て又吾人は山田美妙の上に置くに躊躇しない。山田美妙が當時議論の上からも盛に言文一致を主張し、且つ一生その主張と戦ひ、戦ひの渦卷のなかに戦死した熱烈な態度は吾人の讚美する處であるが、美妙の主張はその根柢が深くない。

今から考へると殆んど想像もつかない程であるが當時の文壇では、雅俗と云

雅俗の
標準

ふ語が頻りに用ゐられた。そして文學は雅でなければならぬと云ふ桂園一枝が主張した様な考も頻りにあつた。言文一致の主唱者の美妙までが此の雅俗の思潮に支配された。(尾崎紅葉は無論雅俗の本尊であつた)だから美妙は詩を書く場合には古い言葉を用ゐた。此の間の消息に就いては嘗つて美妙が

(一)吾々言文一致派が韻文には古の語格を猶ほ捨てぬ、其の仔細は新語格が、まだ雅で無いたため無く、聲調の便利が新語格より舊語格の方に備はつて居るためです。

(二)吾々は言文一致が散文に舊語格を用ゐる必要を見出さぬ、其仔細は散文に於て聲調の便を論ずる所以は無く、既に左様とすれば聲調外新語格にまさる所の無い舊語格を散文に必する效も見出せぬ爲です。

(三)古語が雅か、新語が俗か、吾々は左の場合以外に之を認別する能力を持

たぬと信じます。即ち、言語の雅俗は決してその製造の新古によらず、又其體裁の醜美に因らず、只其の意味と用法とに因るものと信じます。

意味も雅、用法も雅であつて其の語は始めて雅。意味も俗、用法も俗であつて其の語は始めて俗。意味が雅、用法が俗、或は意味が俗、用法が雅と錯綜した時には雅俗の區別が充分明かにはなりません。

(四)或は言語の新古、或は其の體裁の醜美、或は其の緣因を以つて言語の雅俗を定めるのは迷ひです。

(五)吾々が言語の雅俗に對して持つ考へは右の通り、何としても吾々が之を忘れて獨り舊語舊格或は新語格の一方を以つて正に雅或は俗と定めまじやうか。

(六)今日の俗言が美術として今一段進歩を受けたなら充分に韻文には適用が出来やうと吾々は思ひます。勿論雅俗の解釋は第三の通りにして後。

(七) 第三の説を抱いて居る以上は吾々は新古の語に於て其の道理あつて通ずるかぎりには新古に限界を付けて何れを雅俗と定めません。

(八) 語と語法とを混亂するのがいつも言文論の弊です。

(九) 韻文を解する人の能力は目耳及び心の三から成り其の効力は心が第一、之に次ぐるが耳、之に次ぐるが目です。不韻文(即ち散文)を解する人の能力も亦目、耳、及び心の三から成り、其効力は心が第一、之に次ぐるが目、之に次ぐるが耳です。右二者の相違と類似を圖に示せば

韻文……………心……………耳……………目

不韻文……………心……………目……………耳

(十) 韻文が果して散文より人間の理解力の助けを多く受けるものか、是は前にも唱道した論ながら吾々には従ひかねます。韻文も散文も其の人間が有する理解力の助けの數量は相同じです。前の第九は其の數量の同じなのを

圖に示した物です。

(一) 文を誦して澁つて其眞意を盡さぬのは澁滯です。之を誦して澁らず其の眞意を盡くし得るのは不澁滯(假稱)不澁滯と樂調とは猶異なるべき物です。
(二) 其の情は盡くしても其の聲は必ずしも樂調ではありません、不澁滯で眞意は誦しても猶ほ樂調では有りません。

(三) 散文から起る發音(讀誦)の最上は不澁滯です。韻文から起る發音(唱誦)の最上は所謂樂調です。

以上十三條、是が、今始めて公言しますが吾々の言文一致主義の根本の論です。

沈黙の

二葉亭

と論ずるあたりは彼の主張のたゞ雅俗の問題よりほかに拘らぬ淺薄さを示して居るのではないか。是れに較べると二葉亭は別に議論としては何も主張しなかつたけれども、偶然に『浮雲』を出したのである。そして沈黙の間に根底のある煩悶を経て意義の深い作物を公にして來たのである。逍遙の

『小説神髓』の主張も、美妙の言文の運動も、皆二葉亭の手にかゝつて豫想外の深い意義を以て具體化されて居る。かと思へばずつと後に主張されたローカルカラーなど云ふこともちやんと四迷の小説に織り込まれて居る。それやこれやを思ふと如何にも四迷は謎の様でもある。何となく、Silver speech, but golden silenceの面影がある。これをたとへたなら何と云ひ得やう。大古の原人が始めて宇宙の森羅萬象を見て神話を作る。とこの神話が其の人種後來の子孫の活動の全部を抱合する暗示となるやうに明治文壇にとつて『浮雲』は神話的作物である。作者の心はたゞ謙抑ヒュミリテイと熱とがあるばかり。作者自分も何の説明もつかない範圍に屬して居る。

浮雲に
就いて

アリストートルが所謂劇の三一一致、即ち劇に時、處、事件が三つとも飛び離れてはならぬと云ふ規則、此れは日本では小説の上にも劇の上にも皆目なかつた。すくなくとも此の傾向さへ認める事が出来なかつた。文藝批

評と云ふ見地から見て、本居宣長が『源氏物語』に關して云つた事など今日の進歩した批評眼から見て奇蹟と思はれる程に卓見を吐露して居るが、此の三一致論的な傾向は作品は勿論批評の上にも寸毫も彰れなかつた。

それが突然長谷川二葉亭氏の『浮雲』(二十年六月上巻出版)において彰れて來た。當時から文壇未曾有の新作だと云はれた位時流からとび放れたもので、其の規模は狭小で舞臺は主人公岡田一家の外には出ず、時日も一ヶ月以内、小説に出て來る人物は文三、お政、お勢、本田のたつた四人である。前の亂譯時代の才子佳人の奇遇と云つた様な極端に理想主義の弊害を發揮した作風が天下を風靡したに反して、此の地味な質素な作風は全く驚嘆そのものであつた。その作風において全然前驅者(せんくしや)が無かつたと同様に文體においても獨特である。

「アラ月が。……まるで、竹の中から出るやうですよ。鳥渡御覽なさいよ。」
庭の一隅に裁込(うへこ)むだ、十竿(とと)ばかりの織竹の葉を分けて出る月のすゞしさ。

月夜見の神の力の測りなくて、斷雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫も滴るばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭の半より這初め、中頃は椽側へ上つて座舖へ這込み、稗藪の水に流れては金激漚。簷馬の玻璃に透りては玉玲瓏、座賞の人に影を添えて、孤燈一穗の光を奪ひ、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る毎に、ませ離によるばい懸る夕顔の影法師が婆姿として舞ひ出し、さては百合の葉末にすがる露の珠が忽ち螢と成つて飛び迷ふ。艸花立樹の風に揉まれる音の、颯々とするにつれて、しばし人の心も騒ぎ立つとも須臾にして風が吹罷めば、また四邊肅然となつて、軒の下艸に啣く蟲のみ獨り高く聞こゆる。眼に見る景色はあはれに面白い。とはいへ、心に物ある兩人の者の眼には止まらず。唯お勢が口ばかりで

「ア、佳いこと。」

トいつて、何故ともなく莞然と笑ひ、仰向いて月に見惚れる風をする。其の半面よこがはを文三が偷ぬすむが如く眺め遣れば、眼鼻口の美しさは常に變かはつたこともないが、月の光を受けて些し蒼味を帯んだ瓜實顔にはつれ掛つたいたづら髪二筋三筋、扇頭せんとうの微風そよに戦まよいで頬の邊を往來する所は慄然ぞつする程凄味すこみが有ある。漸く文三がシゲシゲと眺めてゐると、頓て凄味のある半面よこがはが次第々々に此方こちらに捻ねじれて……パツチリとした涼しい眼がデロリと動き出して……見とれてゐた眼とピツタリ出逢ふ。螺なまこの壺つぼ々くさ口に莞然にっこと含んだ微笑びせうを細根大根に白魚を五本並べたやうな手が持つてゐた團扇うちあで隠蔽かくして、耻かかしさうなこなし。文三の眼は俄に光り出す。

「お勢さん」

但し震聲ふるごゑで

「ハイ」

但し小聲で

「お勢さん。貴嬢もあんまりだ。餘り……残酷だ。私が是れ……是れ程までに……」

といひさして、文三は顔に手を宛て、黙つて仕舞ふ。意を注めて能く見れば、壁に寫つた影法師が、慄然とばかり震へてゐる。今一言………
 ……の言葉の關を踏えれば、先は妹背山。蘆垣の間近き人を戀ひ初めてより、晝は終日、夜は終夜、唯其人の面影而已常に眼前にちらついて、砧に映る軒の月の拂つてもまた去りかねてゐながら人の心の測りかねて、未摘花の色にも出さず、岩堰く水の音にも立てず、獨りクヨク物をおもふ胸のうやもや、もだくだを、拂はぬも、今一言の言葉の綾………今一言………其の一言をまた言はぬ………折柄がらくくと表の格子の開く音がする………四迷

以上は後に論ずるにローカルカラーの自然描寫の一例にもなると思つて稍長

く引用したが、斯くのごとき文體は現小説壇の文體に比較してその字句の多少生硬不穩當の點はあれ、時日において三十年間のギャップがあると云ふことを一向認められぬではないか。さて此の『浮雲』の文章の由來に就いて

餘程前の事だ。何か書いて見たいと思つたが、元來文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで坪内先生の許へ行つた。何うしたらよからうと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかと云ふ。

で仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふまでもなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速先生の許へ行くと篤と目を通して居られたが、忽ち礎と膝を打つて、これでいゝ、この儘でいゝ、生じつか直しなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

所でこれは圓朝ばりであるから、それは、「私は……………でございます」

調にしたものか、それとも「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪内先生は敬語のない方がいいと云ふお説である。自分は不服な點も無いでも無かつたが、直して貰はうとまで思つて居る先生の仰有ることであり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が發表された。見ると「私は……です」の敬語調だ。自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は始め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので、「です」調に定めたと云ふ。自分は始め「です」調でやろうかと思つて遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反對であつたのだ。……『余の言文一致由來』

と二葉亭は云つて居る。坪内逍遙の助言も此の言文一致にとつては大なる

だ主義
とてす
主義

力があつたに相違ない。處で此の引例にある「です」主義の一例を示すと。

「しかし、なア」……

何が「しかし、なア」です。友禪の長襦袢に男靴は「ぶる」の脈體みやくたいです。連絡の無い無理な楔くさび子は轟く胸の兆候です。「見」と云ふ趣は言葉の外に髣髴として居る工合。悟つたか、相手の書生の眼には微笑の雲。

「目と眉とは宜いかはり口が如何にも見苦いな。けれど後うしろから見れば」……思はず敏くなる力造の鼓膜。

「まあ……白も白いから……美とは見えるだらう。が匿すには及ばんで。見たんだな、君も」

「でも」。透かし出したと云ふ様な挨拶。

「見たんだ。見たんだ。挨拶が鈍い、勢が無い」。

や、根城は陥ちさうになりました。今の處、羨ましいのは米で男を洗つた昔の智慧です。『花ぐるま』の一節

此の「です」主義の生れるについても餘程の波瀾曲折があつたらしい。

私は始めは無論崇拜してゐた馬琴調に似寄つたものを書いてゐた。然るに此處に私の文章の上に一大革命が起つて來た。それは私が斷然馬琴の文章を捨て、言文一致といふ新しいものに就いたことである。

その革命の動機は何であるかと云ふに、私が西洋の文は言文一致であるのに氣付いたことである。も一つは英國文學史を繙くと、詩人のチヨオサアの肖像が掲げられてある。チヨオサアはもと作文を主張して今日の英文の基礎を作つた英國文壇の大勳功者、その人の傳記は如何に自分の頭を刺戟したのであらう！私はその時から自分も彼の如く俗文を以つて文章界に立たうと決心したのである。此の時丁度大學教授のチャンバアレン氏が、文明

と言文一致とは離るべからざるものだ」と云ふ論文を「羅馬字雜誌」に出して、盛んに言文一致の必要を絶叫し出した。辰巳小次郎氏などはそれに反對した。その議論は言文一致はロオマ字ではよいが、漢語の交つてゐる日本文には不適當だといふにあつた。すると今度は物集高見氏が神田の書肆中央堂から「言文一致」と云ふ木版の小冊子を出版して、言文一致を鼓吹し出した。此の本には上欄に平家、源語等の文章を置き、下にそれを言文一致に直した文章が載つて居た。時勢は終に熟した。茲に於てか私も決心して明治十九年に『風琴調一節』といふ言文一致の處女作を出した。其時の文章の語尾は「だ」で「……………」がそれだ。「何々したのだ」といふ調子であつた。然るに世間の攻撃は實に大したもので、「俗だ」と罵り、「下品だ」と譏る。私は包圍攻撃の中心點となつた。で終にまた工夫して「です調」を使つて見た。そこへ二葉亭四迷君が突然「浮雲」といふ言文一致の小説を著はした。

文體は「だ」調であつたが、これは同君新案の「だ」で私が攻撃されたと反對に世間に喝采せられた。その後、同君は私に向つて「君の方ですの方が道理らしい」といはれたが實際に於ては私は敗北者であつた。

(言文一致の犠牲)

文章ははじめ下流に對する語法の方が以上のものより簡單ゆるゑ、言文一致體の基礎となるだらうと思つたまま、此の文のとほり残らずそれが地を占めて居ましたが、また此の頃になつて考へて見れば些し違つた注意も出て來ました故、今は大抵同等に對する語法をして地を占めさせて居ます。

山田美妙「夏木立」の序

又森鷗外が當時の事を記した次の一節は美妙の努力を正當に認められたものである。

「トランスクリプチオン」より一步を進めたるものは、近頃、大に世に行は

るゝ落語の筆記なり「百花園」と云ひ「花がたみ」と云ふ皆是なり、落語の筆記も亦音によりて之を寫したるなれど、その羅馬字會の爲す所に殊なるは單に音にのみ依らずして寢、假名などを正す處に在り然れども美術なる言は未だ必ずしも美術なる文ならず、圓朝が辯は善しと雖もこれを筆に上ぼしたるもの庸劣なる小説家の文にも劣りたらむ雄辯法の研究をなすものは兎まれ角まれかゝる筆記を嗜讀する人は其の趣味の卑しさもおもひ遣られて氣の毒なるものなり。

落語筆記の類より一層高き趣味あるは世間に所謂言文一致なり言文一致體は假名を正し或る一定のていをは用ひて今の言葉を綴りたる文なり此の體の雄ともいふべき山田美妙齋氏の如きは美術なる言文一致體の文を作りて大に國文の進歩を圖られたり。森鷗外「楯草紙」

二葉亭と美妙とは所詮言文一致の大立物である。尙ほ二葉亭と美妙との文體

に就いては皮肉屋の正直正大夫齋藤縁雨がつぎのやうな事を書いて居る。

一、美妙宗、この宗には秘藏のお經あり言文一致と名く飽迄お經に酔つて衣紋をつくろふ外見上戸なり一頃はお難有を唱ふる者頗る多く小説の捷徑ちかみちここを渡れと大繁昌を極めたれど當節はチト甘酒流じやと口上を添へてこれが美妙宗の本體じやといふものはあまり開帳せぬが得手なり想ふに雜兵の服を着て敵將に近かんとしたる何某の軍略に倣へるものならん。或者はこの宗を銀流しと申したり不埒なることをと段々考へ見るに早く剃るとにはあらずして早く出來るとの謂なりし扱々名譽の事共かなこの宗の初級はマア斯うやるべし「向ふから來たのは男です、下駄を穿て居ます、が跡が減つて居ます、そして頭は刈込前の散髪です、フケの雪が襟の麓に積つて居るさうです、是が女ならどうでせう鬚を結つて居るに相違ありません」又時々千古未發の新説を挿むことありその雛形は下の如し「酒を猪口に注

げば猪口の形です、酒を椀に注げば椀の形です。實に酒は方圓の器に随ひます。水も亦其通りです、が水は醉まひません。けれども酒も水も流動體です」總じてこの宗は熱心に經文を誦するなり他宗の耳へ入らうとも入るまいとも斷えず休まで言文一致經をくりひろげること、頭に尊稱辭ゴを加へ「デ、ゴザイマス」で結べば御苦勞で御座いますと申たき程と知るべし

二葉宗

壺がオロシヤゆる緻密々々と滅法緻密がるをよしとす「煙管きせんを持つた煙草を丸めた雁首がんくびへ入れた火をつけた吸つた煙を吹いた」と斯く言ふべし吸附煙草の形容に五六分位費ること雜作もなし其の間に煙草は大概燃え切る者なり緻密が主にて本尊に向ひ下に居らうと聲かけるときあれど敢て問はぬなり唯緻密の算段に全力を盡すべし算段は二葉より芳しと評判されること請合なり

珍語新
造語

さて言文一致が第一に惹き起こした影響と云ふのは、文體が當時の所謂俗文になつてしまつて、種々な珍文句が文章のなかにとりいれられた事である。當時の「早稻田文學」が、頻りに奇體な造語の亂出するを諷してつぎのやうなものを掲げた事があつた。

文壇博覽會

或人近ごろ文壇の正倉院に遊びしとて列品の目錄を寄せられたり重に輕文學壇の列品なるべし

(氣形)西鶴の脱毛、舶來のペダン鳥、モネー鳥、通人氣鳥、生ぎ鳥、盲蛇、人真似猿、シツタカ鱒、無腸公子、大口魚等

(器財)ネタ箕、ピガ箕、ソネ箕、螺大小品々、馬琴の斷絃、白うと絨の小具足、杓木定規、生木にて作りたる額品、笑の中の針、小さき錨數百(食物)手前味噌、から饅頭、豆腐のニガリ、輕燒、世間水、向ふ水、じや水

(珍寶)小刀細工の藻屑、歐米大家の像(鳥羽繪多し)、テニハのみにて綴れる論文、焉哉乎世のみにて綴れる小説、魂入れざる涙佛^{なみふつ}、天狗の羽案するにこは参考室を見おとしての報道ならむ。

美妙にも珍語例の澤山ある方で曾て意地穢き男を形容して「餅と酒とが胃の腑の中で決闘を試みます。脳髓の政府は食慾の法律を設けてこれを禁錮罰金に處しました」と云ひ夜になるのを「太陽は今まさに沒します、沒すれば日は暮れます。暮れれば地球の中は夜です」など云つた。美妙は又頻に外國輸入のマー、ク、。？——……——○「」——***など多かつかひ、口の悪い縁雨は之を評して「極めて器械多し」と云つた。

が其の文章の特色に就き彼がひそかに言文一致にあらすばかくのごとき變化自在に生きた事件の刻々の推移が寫せまいと誇つたのは次の様な一節である。

この隅田堤を、一散に驅來る車、輪が二あります、乗つて居るのは女です。

夜目にはしかと見えませんが、年の頃二十一二色は白く鬚は島田です、車夫は汗を拭き／＼襦袢のシミの材料を我知らず造つて居ます。車や提灯をつけんか、巡査は叱りました。ハイ只今、車夫は答へました。蠟燭がないの？女は問ひました。提灯を點けてから速力は前に倍しました。恰も章駄天の如くです。が酒代の有無は知れませんが、三圍前迄来た時横合から出た一人の男、突然女の頭の物を、奪て逃ました、女は驚いてアレーと一聲、盜賊！盜賊！叫んでも及びません、發矢——雲を霞です。

今日となつて「シミの材料」とか云ふ文字は餘程變にきこえる。その當時も笑つたものは多かつた。が美妙は得意になつて「欠伸の原素」「笑窩の校正」などてふ珍語を用ゐた。雜駁なモザイクの様な此れ等の文章が當時の讀書社會の趣味にはそれでも尙ほ新味があつた。

此の亂脈な文體に對して尾崎紅葉はどう云ふ態度をとつたか。紅葉はもと美

紅葉の
調「である」

妙と共に言文一致の最初の實驗者と傳へられて居るが、彼は美妙程にザツクバランに俗になることが出来なかつた。彼が江戸趣味は何らかそこに新機軸を出さねば満足しないものがある。即ち二葉亭の「だ」調、美妙の「です」調に對して、彼は「である」調と云ふのを起したのであつた。紅葉は此の意味でもその雅俗折衷の傾向を發揮して居る。美妙紅葉はその文章の根柢が雅俗の相對矛盾に苦み、前者は俗を專にして、後者は絶対に雅を保存しやうと努力した。けれども二葉亭だけは雅俗以外の別な根柢から出發したことをわすれてはならぬ。彼には圓朝と云ふ地山の石があつたことを忘れてはならぬ。

美妙と
紅葉

山田美妙の言文一致の主張が、直に紅葉に彰はれて、『色懺悔』となる。『色懺悔』は美妙の『夏木立』『胡蝶』と同様に言文一致試作の代表作のやうに傳へられて居るけれども、美妙と紅葉とは全然出發點を異にして居る。

明治二十二年、神田南乗物町吉岡書店の主人、理學士吉岡哲太郎氏が「新著

百種』と云ふ雜誌を出す事となつて、其の第一輯の小説を尾崎紅葉に依頼したのである。此の時は山田美妙が硯友社に居るを快しとしないで、別に自己獨特な見地から言文一致を創めて盛な勢で『夏木立』を出し、(夏木立は叢書にして雜誌の様に出版し毎篇言文一致の作物を載せた)世間に名を成して居た折からであつたから、紅葉の苦心は別にある。

即ち紅葉は會話を多くとりいれる爲めに文章を碎いて平易にしたのは事實であるが、必ずしも獨特な西鶴調を捨てたのでは無い。寧ろ之れと反對に、西鶴に三馬、也有を加へた様な一新文體を組織したのであつて、美妙とは慥かに逆まに出たのであつた。

此の山中さんちゆうの佗住居。遁世してより若干の月日、今の法名だに知りて呼ぶ人あらざるに。まして俗の名……若葉……他人の名か。鈍おとや我が耳に珍らしくも聞こゆるなり。我が名……若葉……俗の名……俗の時。それを思へば

早や涙。聲も萎れて。

「はい。若葉と申しました。」

書置の名宛は若葉。討死せしは儘にその夫。傷はしやと思ふ心はいと切に
「運あらば目出度歸ると是には書いてござりまするが。あなた其のお姿
では。まさしく討死なされた事と存せられますが……。」

「仰せの通り。敢ない最後を遂げました。」 紅葉「色懺悔」

の一例を見ても、洗練幾十度かしらぬ舊文體であるが、たゞ地の文よりは成る
たけ會話を多くした處に言文一致の體が出来たのである。

雅俗
折衷

が間もなく會話だけ俗語で地を文章體にすると云ふ不調和が堪えがた
く醜惡で不便に感ぜられ出したから、雅俗折衷にない全然クオテシヨ
ンを抜いてしまつた文章を以つて全篇を書きあげてしまつた。『三人妻』前後兩
篇合して三百八十頁、『伽羅枕』二百六十六頁、悉く地の文章である。

その一例をあげると

大殿には十七年前に御逝去なし給ひしぞ！あつとお花は膝なる手をすべり落し、見開く眼に用人の顔を凝視て、少時は瞬なかりき。驚駭はさる事なり。愁傷の程はさぞやと察し入れど、とさまさま丁寧にお花を慰め、當代の殿に此の次第を言上すれば、本意なかるべし不便の事なりとて、私に御謁見を許され、數々の下賜物くだされものもありて、此の事は家臣の手前あれば表沙汰にはしがたし。我とは同胞はらからに相違なけれど、其の地にて縁切りたるからには他人と思へ、此の後音信不通なるべし。我に一人の姉あり、今は柳生某守に縁組みたるが、其方のことを詳よ知りて、女子の同胞なき身はその子懐し、一度は名乗りあひたきものと日常ひじょう仰せ給へば、姉君喜びたまふべきに内密ひそかに對面せよかし。我より添手紙せむとの御意をかの用人取次ぎたれどお花は思ひに思ひし實父亡くなりたるに氣拔して、もはや窮屈なる思ひして、

姉などに遭はでもと思ひけれど、頼みなき身の杖になることもやと、難有く御禮申して御手紙と下賜物を戴きて歸りぬ。伽羅枕

廣津
柳浪

四五年おくれて廣津柳浪は小説を全部會話ばかりで仕あげて見たいと云つたのであるが、紅葉は之と正反對に地の文ばかりで行つた。所詮江戸趣味と深刻趣味の根柢の差が這麼對照を來たしたのであらうが、紅葉は寫實主義の作家でありながらも、寫實主義が當然導かねばならぬ筈の言文一致體に斯様な反對な傾向を産むやうになつたのは、當時の寫實主義が内面から發動しなかつたと云ふ何よりも明白な證據である。寫實主義者と云ふよりは事象一切を必ず江戸趣味の雰圍氣ふんゐきに溶かし込まねばやまぬと云ふ強い個性を持つた氣分主義者と云ふのが至當である。

紅葉の
苦心

紅葉の雅俗折衷は遂に小説から全部會話のクオテエシヨンを抜き去つてしまふと云ふ、今から思へば沒常識殆んど狂に近い事をしてのけた

のであるが、流石紅葉も斯うまで會話を度外視しては又窮極してしまつた、今度は全々正反對に秋毫も地の文の無い會話ばかりの小説を書き出した。「夏小袖『戀の病』など何れもモリエールを雛案したもので百頁以上の小説であつたが之も一行たりとも地の文が無い。

紅葉が斯くの如く極端から極端に、それも何年か時日の間隔があると云ふのでは無くて二十四年の十月地の文ばかりの『伽羅枕』を書いたかと思へば翌年の八月會話ばかりの『夏小袖』を書きその年の暮には又會話没却の『三人妻』に筆を執り又その翌年の春に會話ばかりの『戀の病』を書いた。丸で猫の瞳のやうに極端から極端に飛んで歸つた。斯う云ふ現象はどう云ふ譯で起つたのであらう。當時の人は只紅葉が才氣の走るにまかせてやつたのだと思つたかも知れぬ。あの瘦せ我慢の強い才人紅葉が、雅俗の調和のうまく出来ないのに憤つてそんなことをしたとも思はれる。が、吾人の説明は別にある。曰く内容から

起らなかつた寫實主義に惱まされたのだ。坪内逍遙は堂々と『小説神髓』に逸速く寫實の旗を樹てたが、それを樹立すると同時に描寫論で根柢を革新して置かねばならぬを忘れてしまつたのである。西鶴流の文章で、西洋の審美學から來た寫實主義を具現し完成しやうとしたからである。紅葉の一身にゾラと西鶴とが争つて苦しい煩悶の怨靈を現はしたのである。

此の意味から云つて逍遙の『小説神髓』は我が文壇を片足だけ引つ張つてはやく進歩せよと促したものの、進歩する方ではどうにも苦しくて堪らぬ。若し長谷川二葉亭が『浮雲』を世に問ふと同時に、『新描寫論』を世に出したなら、紅葉はあの様に文章に鏗心彫骨さしんちやうこつしなかつたかも知れぬ。此の意味からして紅葉が文章に種々苦勞を重ねたと云ふのは、單に凝り性とか藝術的良心とか云ふ以外に、別に深い意味の時代苦があつたと觀察され得る。

坪内逍遙の小説界における新運動は、その主張する寫實主義上の見解より、

『小説神髓』と
『書生氣質』と
實

『小説神髓』の一書が在來の小説の内容を根柢的に革新したことは明白であるが、單に小説の文體と云ふ上から見ると、其の影響は左程大きくは無かつた。明治十八年に出た『書生氣質』は『小説神髓』の主張を具體的にした創作、即ち寫實主義の粉本として世に出たものであるが、『明治文學史』の著者岩城準太郎が指摘した次ぎの四ヶ條の文體上の不徹底は中つて居る。

第一、『小説神髓』に「模寫主意の小説には求めずして諷刺諷誡の法備はり暗に人を教化する力あり」と説ける旨を實にせる者ならむも開卷第一に「其れとは言はず語らずして讀む人々に悟らしむる覆車の誠因果の關係云々」と叙べしが如く本文中作者自ら此主旨を説ける箇所屢々見えたり。其の筆致も亦描寫に少くして説明に多く世態の模寫よりも寧ろ其の解説に近からむとす。

第二、人物の心理描寫に筆を着けたりと云ふも其の極めて低き程度に於て然

るのみ。主人公として特に提出すべきなく各人の性格の悉く模糊たる類型に終れる所は所謂氣質物の常態として暫く之を措くも全體の結構到底事件に重きを置くを免れず。而もその變化は概ね偶然の機會に出で人物の性格より來る必然の結果ならず、奇禍奇遇等舊時代傳奇の面影を存する事多く特に大團圓に近づくや急轉直下奇機續發偶然は偶然を生みてめでたしめめでたしとなる所宛然夢幻劇の型なり。

第三、新舊思想の衝突を描いて切ならず内面生活に存する深刻なる衝突を看過して唯魯文一流の外面的衝突にのみ着目せる觀あり。

第四、其の文體においても未新時代の寫實小説に相應する迄に發達せず、全體の體裁爲永一派に比して著しき進歩なく特に地の雅文は掛詞文字鏤り等をもて飾れる馬琴流の七五調を用ひたり。其の他通篇諧謔に富みて輕妙を極むと雖も多くは地口駄洒落の類にして所詮一九魯文の餘唾に過ぎず。

以上は現在の批評壇から見て、『書生氣質』に峻烈な批判の鞭を加へて見ての結果であつて、恐らく是れ以上に此の小説を非難する事は不可能であらう。また此の四ヶ條の缺點に就いては作者逍遙が無理解の爲めに生じたものでは無くて、作者に十分の理解があり新理想もありながら、何分にも周圍が周圍で先づ此れ以上には出ることが不可能事であつたと見ねばならぬ。が要するに内容が飛び離れて新くなつたに比較して、此の新内容を盛るべき器は案外に舊いものであつた。元來坪内逍遙は文章において馬琴の流を汲み深くそれに浸つて居るから、内容上の猛烈な革新熱があるに係らず、外形は何處までも徳川時代文學の大殿將の如く、今日に到るまで、その複雑なる思想を形に彰はすに、『小説神髓』以來あまり變化の無い自家一流の文體で一向不都合を感じて居らぬ。逍遙が今の早稻田大學、昔の東京専門學校に新たに文學科を創設するにあつて、根柢の異つた和漢洋三文學の調和を主眼とした當時もさして

逍遙と
關外

變化もなく全然自分獨特で終始して居る。此れ森鷗外と面白い對比をなす處であつて、鷗外の文章が甚だしく敏感で常に根底を革めて變化するに反し逍遙の文章の同じ根底に立つて漸層的に進むで來たのを想ふと二家の性格なり事業りりが能くわかる。鷗外の文體の變移のやすやすとなされるのは田山花袋も之を評して

鷗外は新時代の文章に内容の方面から非常に大きな影響を與へた人だ。單に文章として見ても、大家の風があつて翻譯の文章は思軒などとは大に趣を異にして居た。あの堅い文章が柔かい『染ちがへ』となり、それから今日に至つたことを考へると型を破つてドシドシ出て行く態度がいかにも羨やましい。『文づかい』や『うたかたの記』を書いた人が『心中』だの『百物語』だの、文章を作ると云ふことは不思議な位だと云つて居る。

柳浪の
新努力

美妙が『夏木立』や『蝴蝶』やにおいて、又紅葉が『色讖悔』によつて小説壇に言文一致體を創設しやうとした努力は、勿論文章を平易にすると云ふ意味ではなくて、微細な刻々の感じを表現するには是非とも現在用ゐて居る生きた言葉を用ゐねばならなかつたのである。言文一致を試みた點で美妙齊よりも早かつたと傳へられて居る廣津柳浪の當時の言に

言文一致はかくのに易いといふのは、恐らく真面目に試みた事のない人の云ふ事だらうと思ひますね、言文一致が流行するから、己もやつて見やう位の人の説だらうと思ふ、一體乾燥無味である言文一致を以つて人物を眞に活動させてゆくには非常に困難なのです、言文一致を易いといふのは研究したことの無い人の云ふことです、今の批評家には發句をつくるとか、新體詩をつくる人が多いやうですが、其如頭さういをもつて見るから言文一致が易いなどと云ふのでせう、詰り主觀的に傾いてる頭を以つて、客觀的

にかゝうと力めてゐるものを見るから、矢鱈に非難もするのなんでせう。とあるのを見ても言文一致試用者の意氣が仄見えて居るではないか、しかし此の初の言文一致はあまりものにならなかつた。

言文一致の試練

かやうな言文一致は當然ひとつの試練を受けずには濟まぬ。試練とは何であるか、即ち西鶴や馬琴やの雅調に養はれて來た紅葉露伴等の作者の思想が、果して俗な平板平調で無味な言文一致で盛り切られるであらうか。紅葉露伴の身にとつては如何にも書き馴れ棲み馴れた雅調の産家に後ろ髪をひかれる。たい語尾を『である』のだ』と變化させればかりでは堪え難い醜みにくを感じず。鶴的で到底満足が出来ない。流石は山田美妙、言文一致主張の音頭おんづ取だけあつて、死ぬるまで言文一致でやり通したが、紅葉露伴はさうは行かなかつた。會話だけは絶対に言文一致としても、地の文の叙景や抒情やはどうしても有りきたりの雅文を用ゐないと腹の蟲が治なまらぬ。紅葉露伴のみならず當時の作者

にあつては此の雅俗の衝突矛盾をどうして調和させやうかと云ふのが共通の問題であつたが、遂に紅葉が「雅俗折衷體」と云ふ旗幟を樹立した。紅葉は自分の家の客間にも雅俗折衷の扁額を掲げ、西鶴調を盛にやりだし、露伴も之と同時に『風流佛』『葉末集』等の小説において自家獨特な圓滑自在な雅俗折衷文を出し、紅葉も『伽羅枕』『三人妻』で新體を開き硯友社一派を始め此の文體が一時小説壇を風靡してしまつた。紅葉露伴によつて雅俗折衷文が試みられたのは實は明治の文壇に西鶴の文調が將に消えんとする燭光が一きは輝いた様に死に花を吹かせた様なものであつた。

が雅俗折衷體の峠を越して再び小説壇に地も會話も全部言文一致が主張されるやうになつて、はじめて落ち付いた一文體一藝術品に完成しあげられたのであつて、美妙を先時代の創始者とするなら、此の大成者は柳浪風葉花袋である。特に柳浪は此の間にあつて餘程苦心したものであつて、明治三十九年出版の『睡

玉集』(青々園宙外編)にのつて居る柳浪の『今後の小説の文體』に就いての談話の數節を抜いて當時の文體變遷上の機微を偲ぶ。

將來の小説の文章は、言文一致でなければならぬし又自然爾たゞなると思ひますね、誰も云ふ説であるが今日の儘の言文一致ちや無論いけません。けれどもです、例へば雅俗折衷にある一種の韻致の如きも段々注意してゆきさへすれば、言文一致にも出來ないとは思ふ、私が言文一致を用ひてゐるのは、決して難きを避けて易きに就く爲めにやつて居るのではありません、詰り種々の人物を描いて活動させたいと思ふ考へから這入つたものなんです。斯う云ふ風にかくには、是非俗語の對話を用ふことの必要を感じる、對話は俗語であつて地の文が雅俗折衷では不調和のやうな氣持がある、其の爲めと今一つは作者が成るべく作中の人物に就いて説明的の筆法を用ゐないやうにとの心掛けからも、自然言文一致をとるやうになりま

した、例へば人物の性格や人物の心の變化せる状態などを見せるにも、作者が説明して讀者に合點させるやうな事はせず其の自然の働きで其の趣の見えるやうにと思つてゐるのです、斯う主義を立て、見ると、雅俗折衷文を用ひると、其の煩ひは受けるが、其の利は受けることが出来ません。何故かと云へば、一體雅俗文の長所は景色を寫したり作中の人物に代つて説明したり、其の外形容することにあるのです。然るに今説明的の筆法を棄て、雅俗折衷文を取れば全然その面白みはなくなつて仕舞ふ。柳浪が此の様に誤つて居るにもかゝらず尙ほ他の一節において

雅俗文で行くと文章の面白味で助けて行くから讀ませるには幾らか樂であるが、言文一致では直に人物その物の活動を見せやうとするから一層困難なのであらう。

と云つて、遂に讀み易いと云ふ點で、雅俗折衷に屈服して居る。此の讀み易い

と云ふことが雅俗折衷以上になるやうになつて、始めて言文一致は完成されるのであるが、之れは遂に柳浪風葉の力では出来なかつた。

是れは要するにまだ文章と云ふものに囚はれて居たから言文一致が讀みにくく思はれたのであつて、文章と云ふ文字の技巧から離れて新式な描寫論から内的な大革命を起した田山花袋が遂に言文一致の最後の最大な功勞者である。けれども花袋も理論の上でこそ描寫論を唱へたれ、その著した小説においてはさう馨かんはしい新しい句が溢れて出なかつた。何故ならば花袋自身も嘗つて雅俗折衷の文章をかき、又文章家として抒情文や紀行文やを得意がつかつた昔もあつたからで、根本から生れ變ることは不可能事で、月桂冠は寧ろ今まで雅俗折衷など云ふ小説を露更書いた經驗の無い島崎藤村や國木田獨歩や正宗白鳥の手に落ちやうとして居る。

短篇小説と云ふものゝ起つたのは明治二十二年『國民の友』に端物小説即ち長

短篇小説の起源

篇を一部づゝ切つて出すことを始めてからである。最も長篇を端物にして出す風潮は前からあつたのであるが『國民の友』の初刷はつばが一時に美妙齋主人の『蝴蝶』春のや主人の『細君』思軒居士の『探偵ユーベル』(翻譯)を出して一時話柄となつた。これにつき坪内逍遙の當時の記録に

件の端物以來(件は右の國民の友の小説なり)世間の小説が總て端物形となり前年の如く冊子の小説を出すを稀になりぬしかれば斯如くなりしは『國民の友』の影響かと云ふに是は自ら別の理由あり他なし此の以前より文章推敵の必要を感ずる者又之を説くもの交々出で暗に糊口の一學にかく俄文客を抑へたり『國民の友』の推敵論(筑水漁夫)の如きは其殿なりしかるに大手腕あるにあらずば長篇を推敵せんと難ければ漸く名を重んずる餘り小説次第に短くなれり、さりながら此現象には尙ほ外に理由あり、一つは社會が骨の無き長物にあきたると一つは小説雜誌が流行して作の短かきを貴びし

が故なり……以上理由さまざまなれど總括して云ふ時は世人の目漸く肥えて文章の妍醜に心附きしと著者が其名を大切に思ひはじめしによる。

此麼次第で先づ短篇小説が『都の花』にあらはれ又此の年新たに發行された『新小説』において思軒居士竹のや主人南翠外史等が短いものを書くやうになつた。此の短篇が糊口の爲めに書く人減り名の爲めに書く人殖えると云ふ結果を産み、文章を重んずるの風頓に盛になり、一方には高田早苗の『美辭學』今村長善の『文章哲學』が出る。それと同時に文章の彫琢盛なると共に浮華虚飾の弊が相伴つて起り、小説家の責任論が出たり、民友社側からは「文學の目的は人を樂ましむるにあるか」など云ふ論鋒が突き出され、小説の内容論がきざし初めて來たから當時の作家には文章に關して動搖が多かつた。此の動搖の間に言文一致が鍊られて來た。

尙ほ此の他に言文一致以外では森田派の翻譯や紅葉流の折衷やがあつたが、

特に注意せねばならぬは西鶴が始めて我が小説壇に復活して來た事である。其の頃西鶴の本など世間に見やうと云つたつて見られぬ位であつた、僅に淡島寒月氏が之を珍藏し、愛讀して居たのを露伴や紅葉やが借りて讀むで、遂に眩い輝きで西鶴のリバイバルが出現したのであつて、二十二年の暮、蝸牛露伴が木曾の天外から飄落して『風流佛』を出すにいたつて西鶴熱が白熱程度に達し、我が小説壇に牢として抜く可からざる影響を胎すやうになつたのである。

東西新聞
小説八宗

要するに此の明治二十二年は小説の文體と云ふことが非常に問題になつた年であつて、女學雜誌が近代文三家（徳富森田饗庭）とか近體小説十家を擧げ『東西新聞』が小説八宗を擧げて重に文體の上から小説を論じたなどその證である。

櫻鬢
小説

一、本科の作家たらむものは、筆先にて人を殺すこと練馬大根を切るが如く心得べきこと、總じて死、自殺、血、美女、意氣地、磊落、

不羈など云ふ想像を絶えず念頭に蓄ふべきこと、

一、總じて寛活なること、すごいこと、すばらしいこと、強いことに心を注ぎ、兼てやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得と致すべき事、

一、『鬼の目に涙』『一寸の蟲にも五分の魂』『武士は喰はねど高楊枝』『柔能く剛を制す』など云ふ説を毎朝百遍づゝ唱へてよくよく服膺すべきこと。

一、言葉使ひはモサ言葉を男子の理想とすれど今更に死語を復活すべきものにあらねば、只精神を彼れにとりて今様の言葉を用ふること。

一、總て奴と云ふ尾語を添へ用ゐて、憎々しげに物すべきこと『うぬ美人め』『うぬ天人め』『うぬ幸福め』『うぬ風流め』『うぬ文學め』の類なり。總じて喧嘩口調をよしとすること。

是は明治二十六年の『早稲田文學』誌上に載せられた小説學校撥鬚科の教則と

云ふものである、村上浪六の小説に對する罵倒冷笑の意を籠めた辛辣な評であるが、能く浪六の文體の特色を發揮して居る。穿ち得て妙である。筆が極めて粗笨で殆んど荒唐無稽であつたが浪六の書いた『三日月』『井筒女之助』『奴の小萬』『鬼奴』『破太鼓』『夜嵐』『深見笠』『髻の自休』等は盛に讀まれた。浪六の筆は尙ほ今日と雖も多數の讀者を持つて居り、『五人男』『八軒長屋』『馬鹿野郎』など版を重ねて居る。

浪華節を小説で行つた様な此の文體は當時寫實傾向と直反對に出たのであつて、嚴密に云へば小説では無くして物語である。だからして趣味は何時も事件の上にある、文章はたゞ氣拔、磊落奔放で最も読みやすい。細叙してくだくだしい面刺を見ずとも、寄席で浪華節を聽いて居る様に慰樂的で且つ興奮的である。づう／＼しき野面のツそりと牛の如き根性を備へながら、またその機敏さは風に翻つて燕の飛ぶに似たる黒田健次が心のうち、もはや佐原男爵夫婦

は我が掌の物として半歳一年を此まゝ此家に喰潰すは何の苦もなければ、
長居して裙から襷縷の下り藤を見られむよりは、世諺にいふ前途を通る遠
目の傘の善い女房、わざと放れて絶間なく附纏はむと、取次の書生に一圓
の煙草料を呉れて馴染みつゝ

是などはその一例であるが、元來浪六の出現は偶然的であつた他の作家のや
うに冷かに文壇の傾向を觀望したり打算したりした結果書いたのでは無くて、
泉州堺の小役場の書記と云ふ彼の前身から一足飛びに新聞小説をかき出したの
である。寫實派の人から見れば、大閣様でも恐しいものは闇夜に何とやら此の
無鐵砲な素直な文體には随分度膽を抜かれ、浪六その人は手剛い飛入り、全く
怕しい他山の石とせられたのである。

観念小
説の起
るまへ

観念小説と云ふ部類の中では泉鏡花の『夜行巡查』と川上眉山の『うら
おもて』廣津柳浪の『黒蜥蜴』の三つを標本とする。

觀念小説の前驅的にあつた春景は寫實小説と撥髮小説とであつた。明治廿五
六年後三四年間の小説壇が必至的に要求した小説の一體である。當時寫實派は
極端にその弊害を暴露したのであつて、所謂逍遙が主事派、鷗外が個想派と
し盛に寫實の惡傾向を論じた後に生れたものである。逍遙の主事派と云ふのは
氏が讀賣紙上に『小説三派』と題して主事派、性情派人間派と分類して、舊作家
のやうに事件ばかりをゴタゴタと書く主事派では駄目、性情性格を描かねばな
らず、更に進むで完全な人間血の通つた人間を出さねばならぬと教へ、加之當
時の小説壇に主事の弊ばかりあつて性情派も人間派も秋毫も無いと痛論した。
此は氏が明治二十三年に發表した論文で、同時に森鷗外もその得意なハルトマ
ンの哲學から類想個想小天地想と分類して、逍遙と同じ様に類想個想の惡弊に
落ちてしまつて、矢鱈に事實を並べて、淺薄を極めるやうになつて、

明治二十四年の事ばかりけろりかんとして見てあらうか雪の白さ年ごろ添

うた亭主の身の丈積つて見ずとも知れた事なりしかる所當今の社會小説に見られよ一概には申されぬが一方は十が八までは「よくつツてよ」の寫實一方は鶴の毛衣をきた廿四年度の嬢さま若旦那、兎角に廿四年度を離れぬは止むを得ざるべき自然の沙汰なれども特殊相に偏つて普遍相がズブ無いゆえ昨日の目にはめでたけれど今日の目にはおかしくなし酷評すれば場當りの政治小説と叔父甥の間柄なり。

と逍遙がその小説的批評文『梓神子』あづまかみこの一節に云つて居る通りになつた。更に之に加ふるに元録文學復興と云ふ當時の形勢は、沃艶な色魔界を寫してその實想を得やうとし、いき、いなせなどますます外形にとらはれだした。此のいきいなせの進化した様な撥鬚趣味は益々粗笨淺薄となり、更に當時の社會には日清戰爭と云ふ多忙なことさへあつて、江見水蔭の軍事小説などが飛び出す時代であつたから、小説壇は一種の闇黒時代であつた。這麼闇黒時代的な混雜に旗幟

を樹てるものは何時の時代何處の國でも必ず傾向文學である。

觀念小説の體

即ち新しい小説は何物か寫實以外にあるものを捕へねばならぬ。あるものは社會を如實に觀察した後を得る結果、作者が社會に對して懷

抱する一種の觀念、勸善懲惡とは全然別な意味の解決小説主觀小説が、鏡花眉山の所謂觀念小説であつた。だからして小説が何處か議論を包むだ袋のやうになる。自然主義の具體的先驅者の獨歩の小説が議論的になつた様に、寫實の暗黒面に一導の光明を輝かさうとした鏡花眉山の文章も、二人ともあのやうな纖麗妖艶な筆を持ちながら何處か議論的になつて居る。同時に觀念小説の傾向が文體に及ぼした影響はたゞ小説を議論的にしたと云ふのであつて、寧ろ惡影響と云ふのを至當とする。だが觀念小説の傾向が、當時の小説壇に題材を全く一新したと云ふ功績は甚大なものであつて、その文章を議論的にしたと云ふのは作者があまりその理想を表すに専らであつて、事件が自然に遠ざかり、社會

觀を體現しやうと急ぎすぎてしまつて、心理解剖も微細なプロセスも描かずにしまつたのを罪とせねばならぬ。例せば觀念小説の代表作とも見るべき川上眉山の『うらおもて』が全體議論文であつて、主人公波多野十郎と勝彌との議論的會話が八割の頁を費し、

我は志を翻へせり。庶幾このねがはくは今よりして其善惡を超脱したる一步高き人となる事を得べきか。我は再び御身に謝す。御身はまこと我が爲めに有難き道師なりき。曩に我は御身の好誼に對して少しは人らしく報ふ處あらむといふし事を覺ゆ

とか。或は

我嘗つて世に弄ばれたるが故に翻つて世を弄びたるのみ。我は既に我が善を味ひ盡しぬ。また我が惡をも味ひ盡しぬ。我は善の苦しみを知つて其の樂みを知らざりき。惡の樂しみを知つて其の苦みを知らざりき。我はたゞ

飽まで我意を振はむとせり。端なくも今日とは或る大なる力によつて遮られき。我は愕然たりき。あゝ知らざりき知らざりき。

など云ふ文字がザラに出て来る。これがその昔西鶴張りの文字を連ねて、「涙の雨も凌げぬ浮世」とか「戀の流れをせきとめた思川」など云ふものを書いた眉山其の人の文體が所謂觀念小説によつて受けた影響であつた。

觀念小説より
社會小説へ

觀念小説とは總て主觀小説の謂である。惡質な輕薄な寫實主義を父に持ち、お轉婆あがりの撥鬚小説を母に持つて生れ出た胤の觀念小説も、遁れぬ遺傳的運命の拙なさに三四年たゝぬうちに毫縁せねばならなかつた。若い小説家の生若い主觀から蒸しだした觀念とやら、實世間に經驗ある

人の眼には、這麼小説は幼稚空疎で讀み續けられず、高山樗牛が

一言すれば今の小説家の根本的缺點は是の實世間是の活社會の共同趣味を捉ふることはせず、其の主觀性の餘りに幼稚に且つ狹隘なること。

と喝破した通り、樗牛ばかりでなく早稲田文學記者も新小説記者も同様な批評を盛にしたのであつた。其處で小説の傾向は自ら成るべく現在の社會に接近し成るべく多數の人に興味を興へべき人物事柄思想を表現しやうとする様になり、現世的社會的な寫實風が鼓吹されだし、その結果成るべく現在の流行の言葉衣服などを細寫しやうとする所謂末節にのみ拘泥する淺薄な作風が出て來るやうになつた。宙外の『縁不縁』新機軸』抱月の『衆生心』柳浪の『纏れ糸』『骨ぬすみ』天外の『三枚襲』などかう云ふ傾向の間に産出された作物であつて、

お蝶は十五歳ばかりで、普通の容色きびやうで決して醜い方みにくでは無い。眼に愛嬌が無いのと、顔が長過ぎるのと、頭髮が縮毛と云ふほどではないが、大うねりにうねつて居るのが疵であるが、近所の若物等しなまための月旦にも十の指の内には數へられる方で、母親のお爲が宅のお蝶はと自慢をした事もあるさうだ。輪を太く榮三郎好えいざぶのこに結び、朱塗の櫛に深く前髪を押へて、もみあげを濃く

見せる爲めに後毛を態と垂げて、其の先をぶツつり切揃へて居る。新秩父の黄の勝つた糸入の牛房ごほうじま縞の袷に、菊盞の大形の唐縮緬と紫色の綿博多の晝夜帯をお太鼓に絞めて居るが、これは不斷着に今着替へたところで簪兒かんざしも手箱の内に藏はれたところである。柳溟りゅうめい『骨ぬすみ』

是が當時又社會小説と呼ばれるもの、端緒をなしたのであるが、社會小説の價値に關しては高山樗牛金子筑水等の斬魔的な啓蒙的な批評があつて、大なる勢力を得るに至らず、殊に文體の變遷と云ふことから考へる時は何の變遷をも與へなかつたと云ふ事が出来る。

井原西
鶴の影
響

井原西鶴の影響が我が小説の文體に現はれたしたのは明治廿三年であつて、尾崎紅葉の『二人女房』と『伽羅枕』と及び幸田露伴の『葉未集』とをその標本的作物とする。西鶴の復活に關しては内田魯庵の綠蔭茗話中にある左の一節を籍りて當時の事情を偲ぶ。

西鶴が正しく明治の文學史に影響を與へたるは争ふべからず。紅露以下の文學は畢竟元祿復興の紀元を開きしなり。而して其復興の起源を尋ぬるに本と愛鶴軒書棚の故紙堆裏より來る。愛鶴軒は淡島氏、名は寶受郎、今は向島弘福寺の境内に住す。初め淺草森川町に在りし頃中西梅花、尾崎紅葉、幸田露伴等諸子屢々其廬を叩きて文詩を談せしが、之より先き明治八九年頃淡島氏は小川町の古本店某方にて古書一とからげを購ひし中に偶然西鶴の置土産を發見したり。豫て京僧種彦、馬琴等の隨筆にて其の名を記憶せしかば日夕繰返し々々翻讀して終に自づと其の妙趣を理解し其の後胸算用一代男を讀むに従ひて愈々獨得の趣味あるを喜び花晨月夕暫らくも離さず之と親みしが此の時西鶴あるを知るものは極めて少かりき。勿論櫻庭篁村氏等は既に涉獵しつゝありしがたゞ元祿の珍書として愛翫せしに過ぎず。之を文學上の價值あるものと認めしは即ち愛鶴軒なり。愛鶴軒は實に明治

に於ける元録復興の祖なり。ニコラス、ローが沙翁没後殆んど百年なり。

西鶴が現はれしは没後二百年にして愛鶴軒即ち我國のニコラスローなり

西鶴が紅露の二家に深く作用した事は何の異論も無いが、しかし吾人の見を以つてすれば西鶴の本領は決して紅露の二家に於いて復活しては居らぬ。

ローカルカラー

此の時期で我が小説の變遷上最も忘れてならぬ重要な項目はローカルカラーと云ふ事である。即ち描寫上の地方色の出しかたが一部の小説家の重大な研究條件となつた事であつて、その極ごくの最初は、無意識的ではあるが前に例をかゝげたかの長谷川二葉亭の自然描寫、浮雲第三回の月光を寫す所第七回の上野の秋色を如何にも楚々として景情を漲しめたあたり及び翻譯ではあるが『あいびき』に現はれて居る自然などは、浮雲以前の小説壇には絶無の試みであつた。けれどもそれはまだ眞實の意味のローカルカラー尊重では無かつた。たゞ二葉亭以外の作家があまりに人事に重きを置き、且つ人事の偽つたも

のを偽つたまゝに描いたのに對して、彼は極めて率直に描いた。だからして時潮と逆行し、痛快に圖抜けた程度は偉大であつたけれども、それはたゞ一班的に率直に書いたと云ふに止まつて居て、まだ地方的描寫に於ける眞個の特殊化が無かつたのである。

恐らく日本でロカルカラーと云ふ事を眞つ先に言ひだしたのは柵草紙であつた。森鷗外に其の當時の事を聽いて見たら次のやうな答であつた。

わたくしの記憶によれば、柵草紙に物を書いてゐた頃、度々「ロカアルコロリット」と云ふドイツ語を使つた。其頃「ロオカルカラー」と云ふイギリス語には、わたくしはまだ國文中で出逢はなかつた。間もなく右のイギリス語を新聞や雜誌で見ることになつた。わたくしは自分がドイツ語で表現した概念を、少し立つてから、人がイギリス語で表現してゐると、當時思つた。併しわたくしの言つた事を聞いて、人が言ひ始めたのだから、それと

もわたくしの言つた言はぬに拘らず、人は人で言ひ出したのだから、それはわたくしには判断が出来なかつた。

樋口一 葉とロ ーカル ラー

そして誰の作が一番初めにローカルカラーを具體的に出したかと云へば、先づ樋口一葉の『たけくらべ』であらう。幸田露伴も『潮待ち草』に『たけくらべ』を絶唱し、別にローカルカラー云々の事は意識せぬ位ではあるが、しかも

單に大音寺前の有様を叙し、つゞきて其のあたりの兒等の學ぶ小學校のありさまを叙し、さて其の小學校の生徒たる信如と云へる兒を一寸叙し出せるばかりなれど遊廓近き地の自然と他と違へる様眼に見る如し

と云ふのを始めに縷々地方的特色の文字に溢れて居るのを賞讃して居るのは評者作者と同じく暗々裡にローカルカラーの要諦を掴んで居るものと見られる。實際において一葉の文の至るべき處に至つて居る名文であることは識者の一致

する處であつて、一葉の文章を批難した評家は一人も無い。今其の有名な大音寺の描寫と云ふのを少し例にひく。

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取る如く明けくれなしの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとて陽氣の町と住みたる人の申しき、三島神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる家もなく、かたぶく檐端の十軒二十軒長屋、商ひはかつふつ利かぬ處とて半ばさしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる串のさまもをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干しつ夕日に仕舞ふ手當ことごとしく、一家内これにかゝりてそれは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に慾深様のかつき給ふ是れぞ熊手の下ごしらへと云ふ正月門松とりすつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは誠の商

賣人、片手わざにも夏より手足を色どりて、新年着の支度もこれをば當てぞかし、南無や大鳥大明神……………

此の小説の出たのは明治二十八年であつたが翌年一月初號を發行したためさまし艸(鷗外、露伴、綠雨等の雜誌)では明に此の作者にはローカルカラーがあるなと云ふ評語が現はれた。無論一葉自身はローカルカラーも何も介意した譯では更に無い。其の間の消息と理由とを最も力よく説明するものは嶋崎藤村の女史の作品が女史の生涯と密接に相觸れて居た事は最も吾儕の注意を引く點である。同じ女史の作物の中でも、初期のものは離れ々の感がある。「大晦日」あたりから急に接近して來て、「たけくらべ」となると最もよく相觸れて居るらしい。

と云ふ平凡だが深意ある評語より他は無い。一葉のローカルカラーは無自覺なだけに渾然として居る。一旦自覺が生じて來る時は、意識的になり渾然の味は

ひが無くなる。即ち一葉の後に起つた後藤宙外の田園文學がそれである。たゞし宙外の田園生活は必ずしもローカルカラーの爲めではなくて其の第一の目的は文士須く都會にあつて生活難に苦むよりは意を決して田舎に退き悠悠自適して大作を世に出すべしと主張したのであつた。宙外にあつてはローカルと云ふ語義が地方の特殊相と云ふのではなくて、都會を離れた田舎と云ふ意味になりて居る。宙外の運動は眞の意味のローカルカラーを描く文藝ではなくて、紅葉一派の江戸趣味、町趣味に反抗した田園の趣味の鼓吹である。山村水廓趣味である。之れを代表する宙外の第一の作は『闇のうつゝ』であつて二十九年九月に出た。

甲駿の境なる籠坂峠の更も二よたうねりよたで頂上といふところに、道をよけて少しの窪地あり。茲に年經たる椽木とちのきの、幹のふとさ、帯にて一捲位なるが立てり。枝繁りあひて四方幾十坪をか蔽ひ、こんもりと暗き木蔭に、笠にかくる程の泉湧きて、さらさらと心地よき音絶えねば夏は旅人の此所に生命いのちを

拾ひどころと、とらみづ 椽水の名此の堺隈に高し。今こゝへ須走の方より、汗忙しく拭きながら、息はづませて、上あがつて來た商人體の男、べつたりと颯起げし椽木の根に腰かけ、少し動悸鎮めて、清水に喉をしめし膚を拭ひ、その根に戻りて、靴の中よりソーレスの小匣取出し、巻蓑をふかしながら蘇よみかへ生つた様な心地になり。悠然と向ふを見やれば、茲の老木の靡ける枝に巔はかくれて、大塚小塚その外の小山ふまへて立ちひろがれる富士の裾、半腹のあたり濃こみどろ緑に紫の斑まじりうるはしく、斷れぐの白雲横なぐりに飛ぶことはやし「オヤ風か」と前峯の松の狂へる如き枝ぶりに目止まる途端、ヒヤリと襟元に落ち散るものあり 宙外そら闇のうつゝ、』

ローカルカラーに就いては三十年に「帝國文學」の記者が、スチブンソンが「遊船紀行」のうちの森の香かほキツブリングが「七海の歌」ドード、ジョージ・サン、及び尾崎紅葉の「二人女房」、「多情多恨」に於ける東京家族の特色及び幸田露伴が「木曾

の『瀟灑』の一段の文致などを引いてローカルカラアのことを論じ、暗に宙外等の田園文學に對して

新らしき作家のうちには田舎の生活に筆を染むるもの多きが如し。然れども夫れは大方場面のみを田舎と稱したるのみにて人物と云ひ事實と云ひ都とも付かず田舎ともつかぬが多し。讀者をして全く心をその場面にうつして田舎にある想をなさしむるものなし。

ローカル
カラー
と
郷土
藝術
論

田園趣味とは根抵が異つて居るが、後藤宙外等の田園文學の新運動に甚だ力強い根據を與へ理論的に此の派の文藝の爲めに萬丈の氣焰をあげたのは片山孤村であつた。孤村が明治三十九年四月『帝國文學』に郷土藝術論を説いたのは、花袋藤村等のローカルカラーの文藝と相對して忘れることの出来ない新藝術鼓吹の努力である。孤村の郷土藝術論は我が小説壇とは遠く飛び離れた獨逸に於ける郷土藝術運動の紹介にとゞまつたが、はじめ『神

「經質の文學」と云ふ長論文で世紀末的な文藝、デカダンの文藝が淺薄な物質主義から脱胎された廢類の藝術に過ぎずと説き最後に郷土藝術論に於いて

自然主義、寫實主義、象徴主義などは寧ろ技巧の變化に過ぎぬ。例へば千古の詩聖ホメールは寫實的技巧に於ては或は小新聞の三面記者に劣つて居るかも知れぬが、ホメールは不朽の生命を受け、三面記者は一日にして忘られて了ふ——けれども主として都會文學たるに過ぎぬ。氣宇狹小にして俗臭に満ちて居るのは勿論である。此の俗臭紛々たる市井の氣に代ふるに清新なる「土臭」[Erdgeruch]に富むだ郷土の野趣を以てするものが郷土藝術の目的である。郷土藝術とは即ち「田園文學」では無いかと反問する人があるだらうが、郷土藝術は歴史及び國土なる偉大なる根本解念に基いて居る點で、所謂「田園文學」よりも遙かに進歩して居る。遙に質實である。又遙に廣大な目的を有つて居る。

と叫んだ。此の論は、他人の議論に首肯するを耻辱と思ふ不心得な最近の文壇において、騒しく反響に反響を産むやうな所謂世俗のプロジツトは得なかつたけれども彼が紹介したリエンハルトの主張や郷土詩人グスターフ・フレンセンなどの文學は小説壇の識者に沈黙の間に影響を與へたものと見る。

此の意味から云つて宙外などの田園文學はたゞ紅葉等の江戸趣味に相對的に對して起つたと云ふだけで、都會も面白いが田舎も面白いと云ふ程度に過ぎない。根本的に新生面を開いたのでは無くて、一寸取扱の範圍を擴げて見たゞけである。

宙外の田園文學に比べると島崎藤村の『破戒』は一段の深さを加へて居る。田園文學の域を越して郷土藝術の芬園氣内に這り込んで居る。此の郷土藝術と云ふ立場から見て、『破戒』は最も紀念すべき作品であつて、文體變遷の上から重大な意義がある。

單にローカルカラーと云ふ努力の上から云つて、『たけくらべ』の樋口一葉は無意識であつた。後藤宙外は田園趣味の鼓吹に過ぎ、その寓居を態々猪苗代、湖畔に卜したりなどした點で世間の注目を惹いたけれども、要する取扱擴張と云ふ以外何物もなかつた。水平的努力であつたが、垂直的な高上は無かつた。矢張り無意識と云ふに外ならぬ。藤村にはその意識があつたか無かつたか判らぬ。が今までの硯友社的な筆致を寸毫も弄ばなかつた處女的な創作力は、直接的にローデンバッハなどの主張が體現されたのであつた。世間では長塚節の『土』も立派な郷土文藝であるなどと云ふが、あれは必ずしもさうでない。根氣のいゝ細寫主義で郷土の事件を取扱つたまでであつて、孤村の所謂國土と歴史とを重じた點は殘念ながら觀取することが出來ぬ。

尙ほ序に一言して置きたいのは田山花袋が西鶴について左の言をなした事である。

私はいつも西鶴を讀む度に思ふが、此の作者位日本でローカルに注意したものはない。これ即ち西鶴の『元祿の西鶴』『難波の西鶴』『旅行家の西鶴』たる所以で、また飽まで寫實的價値を有して居る所以である。田山花袋

翻譯文學の變遷

此の時期に於ける翻譯文學の變遷も亦意味深い跡を残して行つた。二葉亭の翻譯したツルゲネエフの『あひびき』は彼の小説と同じく前驅者も模倣者も無いが、矢張今日の人の翻譯と比較して、その文體も移植の方法も三十年の時代の差異を發見するに苦しむ程である。

特色のあるのは森田思軒と森鷗外との翻譯であつて、前者は『十五少年』に後者は『即興詩人』にその最高潮を示した。

思軒には思軒調がある、それについて徳富蘇峯が面白い言をなして居る。兎もかくも思軒は最も讀みやすき翻譯を出し同時に一種の力を移植することに努めて優に一家をなして居る。

思軒の文章は及ぶ可し。其の會話及ぶ可からず。

思軒の翻譯は餘りに念入り過ぎて却つて粘皮の痕あり。

思軒の文章は字烹、句鑄。恰も磨き竹を以つて建仁寺垣を結びたるが如し。

思軒の小説は、御姫様が味噌漉提げて豆腐買に赴く風情あり。

思軒の文は淡中腹味あり。鍛練の文、一字、一精神。故に思軒多く作らず。

尙思軒自身の翻譯の態度及び作例を見るに

英吉利の文章を佛蘭西に譯し、佛蘭西の文章を獨逸に譯すると云ふ事は其の差違が西洋の言葉と東洋の言葉ほど甚だしい懸隔が無いのです。それで、とても私には出來まいけれど、もし能ふべくば、其の言葉の姿の西洋と違つて居るのを違つて居るまゝ、幾分か見せたい………たゞ當に意味を取るばかりで無くして、言葉の姿も合せて取らうとした………副詞、形容詞の數多く重なつたのを譯する場合、或は長い句と句とを繋ぎ合はした關係代名詞を

譯する場合等について幾分か詰まらない縁の下の力持をした……………森田思軒

然り、死なる哉、死なる哉。且つや余が心理の聲は反覆余に向つて縦ひ余が死、死、と求むるも、余は到底死を得るの憂へ無き者なる事を、擔保せり。凡そ死刑を申し渡さるる者の、寒き、雨多き、冬の夜の夜半、濕りたる陰鬱の室の内にありて、炬火の下に於てならで、他の時他の處に於て、之を申渡されし者ありや。今や八月の月に於て、此の如き美はしく晴れたる日の朝の朝の八時に於いて是等寛仁慈愛の相を具へたる陪審官上にありて、而かも余を有罪と斷することあるべきや。余の眼は再び、かの太陽の光を浴びて立てる黄色の小花の上に注ぎて、復た他に轉せず。

『死刑前六時間』(ユーヨー)思軒。

思軒の此の文體は創作小説壇に大なる影響を與へた。二十一年に出た須藤南

翠の『朧月夜』などは特に適切な一例である。試みに南翠の自家本来の作風と云はれる『荒海貫一』の一節とを並べて左に掲げる

池上は双の手を疊に突きて照子が友愛至切なる情訴を聴きまた主君の令妹として吾に斯くまで敬禮を施さるるに感じて常には喜怒ともにその色を見て知り難き面には帝王截開の爲めに過つて人の妻を殺したる時の如き秋色を帯びバチルレンの微でも尙ほ觀んとする明かなる双眼には蒸溜器の點滴の如く清らけき涙のはらはらと瀉りぬ。之れを觀る照子は益々その人の誠衷まごころの心に嬉しくて婦人に多き涙宮なみきには漲り騒ぐ洪水を招きたりける。…

『朧月夜』 南翠

笑ひが至つて冷やかであつた。冷かなうちにも自ら掩はれぬのは苦しいと云ふ機關の溢り、今まで油をさした悪魔が此の機關で搾殺される苦しさ、徳性と云ふ技師も中々意地がよくない男と見える。吾が顔を吾れ自ら見る

ことは出来ぬが、山登は目がないだけの腦府の大明神が其の裡面から見せたであらう。『此の木免め、言脱けやうとしても、此の辻番には活きた大哥哥が眼張てるぞ』是れは余の感情である。また冷やかに笑つて呑み込むで面目なげに余に對つた。……『荒海貫一』 南翠

因に須藤南翠は明治六七年の戯作者殘存時代から小説に筆を執り絶えず順應の才を振つて時代々々の文體の變遷に應じ一々影響をうけ或程度まで成功した。彼を稱して文體のカメオンと誰やらが云つたのは蓋し至言である。『朧月夜』の文體に關し坪内逍遙は思軒體に四六駢體を加味したものと評した。

鷗外の
翻譯

『卽興詩人』は『埋れ木』の後に鷗外が譯したアンデルゼンの傑作『インプロヴィザルトン』であつて高雅な擬古調を以つてし、激越に缺くる處はあるが溫籍であつて朗々玉の様な味ひがある。茲に二葉亭の翻譯振りと鷗外の翻譯振りとを比較して面白い對稱が得られる。それは二葉亭は翻譯をしても創作らしく見えるに對し、鷗外のは創作をやつても翻譯らしい匂ひがする。

鷗外は學に忠であつて、二葉亭は人間に忠である。鷗外は其の深遠の學識と確立した審美見に基き、典據に忠實にして一點一劃を濫にせず慎密で注意周到のいたす處である。此の好譯文を以つて明治二十四五年の頃にドーデー、ハツクレンデル、クライスト、ステルリン、トルストイ、ツルゲネエフ、アーピング、ブレットハート、ホッフマン、シユビン、フレンツェル、レルモントフ等を譯し範圍を全歐に擴げた紹介をなしたのであつた。茲に其の『即興詩人』の一部を例に引用する。

街のはつる處に「コロッセウム」の頂見えたるとき、われ等はかの洞の方へ行くにやと畫工に問ひしに、否、かのよりは迥に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたを景色と俱に寫すべしと答へき。葡萄の園、古の混堂ゆやの跡を圍みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。緑の枝を手折りて車の上に挿し農夫はその

下に眠りたるに馬は車の片側に吊り下げたる一束の秣を食ひつゝひとり徐に歩みゆけり。やうやうエジエリヤの洞にたどり着きて、われ等は朝食を食べ、岩間より湧き出づる泉の水に葡萄酒混せて飲みき。洞の裏は天井も四方の壁もすべて絹、天鵝絨などにて張りたらむやうに、緑こまやかなる苔生ひたり。露けく茂りたる蔦の、おほいなる洞門にかゝりたるさまは、カラブリヤの谿間なる葡萄架を見る心地す。『即興詩人』 海外

『即興詩人』が世に出たと同年即ち明治二十六年には内田魯庵がドストエフスキイの『罪と罰』を翻譯した。此の年は民友社の『十二文豪』とか博文館の『世界文庫』などがあつて眞面目に海外の文藝を移植しやうと云ふ運動が勢をなして居たのであつた。ゾラの小説などを讀むものも澤山たくさんあつて、古本屋から買ひ込むだ一群の洋書のなかに偶然ゾラのナナがあつて漠然ながらも寫實主義の權威を認めて驚異の感を抱いた小杉天外もあつたし、外國から歸朝した勢旺いっせい勢に

「おほん」と高く澄し込むで外國輸入チャキチャキの新文藝を樹立するため山岸荷葉が『東京文學』を發行したのも其の當時であつた。

第四章 新文章の完成（明治三十三年以後）

文壇末流論——武藏野——小栗風葉——文士講談——二大缺點——諸家の意見——自然主義
と言文一致——田山花袋と新文體——實經驗——没技巧論——柳浪と自然主義——文章の力
——文の新舊——寫生文と新文體——漱石と寫生文——漱石と露伴——近代文學の特色——
Sensualism——Impressionism——Symbolism——ソフトな文體

文壇末 流論

明治三十三年と云ふ年は種々な意味で明治文學史中に新たなる一項を劃する事である。此の年森鷗外は九州の一新聞で『文壇末流論』と云ふものを書いた。その論旨は要するに當今の文壇は紅葉露伴等大家は高踏自重してしまつてあまり世間に出ず、殆んど隱居同様の姿となりそれに代つてやぐざな末輩がワイワイ騒いで居る小生意氣な文壇であると云ふことを論じたのである。所が新しく勃興した諸派の文士はそれを非常な侮辱として諸方から鼻呼

吸^き荒く馭論を試みた。網島梁川内田魯庵後藤宙外島村抱月等は各々獨特の批評的見識を以つて森鷗外の言に反對したのであつた。特に「讀賣新聞」に居た星月夜の島村抱月の筆鋒が最も鋭く

今の文壇は決して紅葉露伴の續きでもなければ、其の末流でも無い。潮流は明に一回轉した後である。此の新潮流に掉^{おぼ}すものは、縦し紅葉にもせよ、露伴にもせよ、既に前期の生涯を終へて我等と平等なる新驅逐場裡に這入つたものと言はねばならぬ。其の上は男兒はたゞ一管の筆あるのみ、時猶淺し、本末大小の分はまさに是れから以後に定まるのである。我等と諸家と大に争ふべきはむしろ此の後にあると信ずる。

と論じて旺なる意氣を示した。そしてその意氣は島村抱月一人ばかりではなくて實に文壇の全般に亘つて居た。勃興の徵は前の明治三十二年既に明かである。丁度日清戦役の影響をうけてその戦後に緊張して來る年頃にあたつて居る。高

山樗牛の時代精神論が出るし、東に『ほととぎす』西に『己が罪』と云ふ讀者の範圍の廣大な小説が新聞に出始める。正岡子規は雜誌『ほととぎす』にその寫生文を創めた。之れを前年の『早稻田文學』新著月刊『めさまし艸』など廢刊された文壇の大不景氣に比べると慥に一陽來復の趣がある。文壇は慥に紅葉、露伴、得知、篁村、綠雨などの手から、鏡花、風葉、宙外、不倒、抱月、天外、蘆花、幽芳の手に遷つたのである。此の年又後藤宙外は田園生活論を發表した(田園文學ローカルカラー郷土文藝に關しては前項に論じた)

獨歩の
武藏野

明治三十四年の小説壇は即ち樗牛が之を通觀して紅葉露伴を葬れよと絶叫した年であつて國木田獨歩の『武藏野』が出た。同じく泉鏡花は『高野聖』を出した。共に都會離れた地方の描寫であつて、一種のローカルカラーを發揮した文體であつたが、鏡花の『高野聖』の方は鏡花一流の神秘的な色彩のある筆致で飛驒地方の山深い景色を活躍させたのであつたにも係はらず、未だ

その地と景色との雰圍氣から直接生ひたつた生命ライフに觸れず、且つ其の小説の傾向が超人間的であつて文壇の新意義に添つて來た新文體だとはゆるされぬ。それに較べると獨歩の武藏野は慥に新たなる立場を開拓したものであつて、彼は武藏野を寫すにあたつて、武藏野特有の自然相シヤンサウを捕へてそこへ自己の新しい生活を樹殖しやうとした。

鳥の羽音、囀る聲。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ聲。叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音。空車荷車の林を廻り、坂を下り野路を横ざる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か。さなくば夫婦連れで遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村の者のだみ聲、それも何時しか遠かりゆく。獨り淋しさうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣のエ林でだしぬけに起る銃音。自分は一度犬を連れて近所の林を訪ひ、切株に腰をかけて書を讀んで居ると、突然林の奥で物の落ちたやう

な音がした。足もとに臥て居た犬が耳をたて、きつと其方を見詰めた。それぎりで有つた。多分栗が落ちたのであらう、武藏野には栗樹も随分多いから。若し夫れ時雨しぐれの音に至つてはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨は我が國でも和歌の題に迄なつて居るが、廣い廣い野末から野末へと林を越え、森もりを越え、田を横ぎり、又林を越えて、しのびやかに通り行く時雨ときどきの音の如何にも幽かたで、又鷹揚な趣きがあつて優しく懐しいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は嘗つて北海道の深林の時雨に逢つた事がある。これ又人跡絶無の大森林であるから其の趣は更に深いが、其の代り武藏野の時雨の更に人なつかしく私語くが如き趣は無い。

是は其の一節である。此の一文がローカルカラーと云ふ上では眞に記念すべきものであることは、時代から云つて二葉亭の『浮雲』それから一葉の『たけくらべ』、そして獨歩の此の『武藏野』と指を屈すべきである。今までの文學では同じ

植物を描いても、見越の松に月が出る式なものに過ぎなかつたが、獨歩は始めて大平原の林野に美觀を求めた。後に獨歩はよく『驚きたい驚きたい』と云ふ事を云つた。それはあらゆる常套の疲れた氣持から全く離れて、われわれ人間の先祖が始めて太陽を見、月を見、夜が襲つて悲み、朝になつて狂喜したやうなびつくりした新しい初心しんしんな氣持で小説を書き度いと云ふ願である。そして獨歩は此の初心しんしんな氣持になつて武藏野を観察した。自然主義の三作家として後に花袋、藤村とともに其の眞價が社會に認められるやうになつたが、自然描寫乃至ローカルカラーの點——廣く文體の上から云つて花袋藤村よりも迥に具體的に意義ある鮮かな影響を後に及ぼしたものである。片上伸が自然主義者の文章を評してザクザクと鑿を打ちこむやうな文章と云ふことを云つたが、その趣は獨歩の文章において遺憾なく發揮されて居る。花袋が新しい文體を理論的に鼓吹したに對し獨歩はそれを着々と體現して居たのであつた。けれども其の當時

にありては獨歩藤村の作品は一向世間に認められなかつたのである。試みに明治三十五年に出た獨歩の『少年の悲哀』藤村の『舊主人』に對する當時の『早稻田文學』めざまし艸』廢刊後唯一の文學上の高等雜誌たる『帝國文學』は實に左掲の如き批評を下したのであつた。

■少年の悲哀 作者姓は國木田、名獨歩。すこしは文壇に野心のある男と見えたり。作は拙劣讀む可からず、筆の穉氣ありて乳臭を脱せざる、尋中二三年生さへ、此れ程の惡文は作られる可し。吾等本篇の作者が厚がましくも此の如き作を投じて自ら疚しとせざる勇氣に驚倒せずんばあらざる也。

■舊主人 詩人藤村の作亦新小説に出でたり、下婢の口を假りて婦人の姦通を物語らしめたるもの、作として見る可きなく、採るべきなく、稱すべきなく、殆ど小説の形體を備へざるに似たり。思ふに氏は新體詩人として成功すべき者にして小説家として失敗に歸すべき者に非ずや。かつて一葉

舟落梅集及び文學界に出でたる美文及び小説の如き新體詩に比すれば甚だしき軒輊を有し、平弱萎靡氣力なく輕快なく、平麗暢達の僅かに見るべきものあるに過ぎず、舊主人の作の如き、亦等しく此の非難の繰り返さるゝ迄にして何等進捗の形跡を印せざるが如し。詩人なれ／＼強て小説壇に旌旗を翻さんとして却て失敗の井中に陥る勿れ。

風葉の
致言文一

小栗風葉も三十年頃かち全然言文一致で書きたした。其の當時の事情を風葉自身が語つて居る。曰く

俗文體といふ形式のも書くは書いたが、甚だ變テコなものだつた。つまり坪内先生が一時書れたやうな文體、後藤宙外君が『ありのすさび』に用ゐたやうな文體で、僕も『國民の友』へ『鐵道工夫』といふやうなものを書いて見たが、他は言文一致でありながら句の終りだけが、しぬたりなり、けりなぞの文章語で行つて居る。木へ竹を接いだ如きものが出來上つた。併

しこれではどうしても思ふやうに、透明に直截に自分の考へが出て居らぬから、殆ど涙を揮ふばかりの大決心でやつて見たのが『新著月刊』へ出した『十七八』といふ短篇である。あれは僕の言文一致の最初の作であつた。

風葉と同じく硯友社の出の人は皆言文一致を書きだしたが、ただ一人泉鏡花だけは、文章の巧妙なる點において師の紅葉よりも眉山よりも傑出したと謂はれる。鏡花は結尾の言葉だけで、あるのだに代つても、文章が一流の型に掛つてしまつて牢として抜く可からざる鏡花調が出来てしまつた。露伴はその強烈な理想主義的傾向から寫實主義に轉じたけれども彼は言文一致と云ふ事よりも、逆に言語の改良と云ふことを叫び、最も読み易く最も自家に適した文體を創出した。明治三十六年世に出した『天うつ浪』は其の代表で次の様なものである。

自信は強くとも、學問は博くとも、氣の働きは八方に鋭くとも、まだ世に老いぬ心の柔やはらか軟わづかに嫩わかければ、人には知らさず秘め置きたることを、つけ

つけと靦面に云ひ出されては、胸の真正中をした、かなる箭に羽中の節せめて射込まれたる思ひして、ハッと驚き惑ひしが、元來底の弱よわからぬ男なり、忽ち我れに返つて悪びれず、靜に我が腔内くわいの血の跳りの鎮まるを待ちながら、身動きたにせずして大人しく島木のいふところを聞かんと仕たり。島木は人の情こころの流れの瀬に、慣れきつたる鶉の目の働き敏捷すばやく日の光の明らかなるに我が影を怯づる若鮎の振舞の、優しくもしほらしき水野の様子を見て取つて、曾て吉右衛門より聞きしと、今直接に聞きしとの二つの談話に照らし合はせて大概の事は曉り盡しつ、今更にまた油然あぶらとして愛憐あいれんむ心の起るに堪へぬが如く言葉づかひも碎けて露隔へちま氣なく……『天うつ浪』

文士講
談

明治三十三年五月新小説は臨時増刊『春鶯囀』を出して文士講談を試みた。紅葉小波鏡花眉山水蔭秋濤得知露伴等が講談師のやうに小説を口演してそれを筆記して世に問ふたのであつて、言文一致工夫の一努力であつた。

無論「新小説」の編輯者の立場から云へば此の方法を幾度か續けるのちには立派な言文一致を齎すことが出来るだらうと信じたのであらうが結果はたゞ座輿に止まつてしまつた。次に其の當時の所謂文士講談の筆記を偲ぶために眉山と露伴と紅葉との例を引く

文士の口演といふ、何うやら素人義太夫といつたやうな格で、随分堪つたものではない處も澤山にございませうが、忍で暫くの間の御辛抱を願ひます。實はわざ／＼お聞かせ申すのであるから、何か變つた獻立をと思ひまして、西班牙種の英雄譚で、口演などには至極妙といふのを撰びました處が、生憎く其の原本が未だ手許に参りません。そこで間に合せの摺み料理、いつの事でしたか阿米利加の雜誌やら本やらを亂雑に讀み散らした中にあつた談話を不圖思出しましたまゝに、ざつと煮返して冷めない中に今と差上げる事に致しました。『五十年』眉山

今日は上野公園の精養軒で蓮田法學士が佛蘭西へ留學を命ぜられたため其の送別會が開かれた。會は非常の盛會で、參集者は無慮二百名と註された。が東照宮の森に夕鴉が聳を求めて啼き噪ぐ頃に、人々も思ひ／＼に歸途に就いた。……『不安』 露伴口授稿伴筆記

扱私のは茶碗割と題するので、今より約そ二百餘年前、頃は元祿年間の物語。よく今日でも言ふ事であります。昔の人は物堅い、律義であつた、それから見ると今の人間は實に悪黠わるごとすい。成程悪黠なるほどわるごとすい。……

『茶碗割』 紅葉口演木川忠一郎速記

要するに三十五六年まで否それからまだ後の四五年すくなくとも『破戒』が出た明治三十九年頃までは言文一致の試鍊時代であつて島村抱月の如きは才にま

かせて言文一致にしたり文章體にしたりしたし、その頃批評壇の最高權威を以つて自ら任じて居た高山樗牛などが全體文章體を以つてしたから文章體は如何にも識者らしく見えて居た。そして文體は混亂に混亂を重ねた。「帝國文學」の記者が「文學と嵌細工」と題して

見よ近時『美文の珠玉』『美文斷片』其他類似の題號の下に、和漢文中の佳言好句をば、亂雜に網羅排列せる片々たる小冊子の續々として上梓せられ、日ならずして再版せられ、三版せられつゝあるを。苟も一個の文章家とならむと欲する者は一片の銀貨を投すれば足る。一たび此の小冊子を翻かばいかなる場合に於ても忽に乾坤を動す底の絢爛たる一大文章を得べし。著者は蓋し文學の技を以て嵌細工的の技藝と同一視して植字職工をして一躍して天下の大文章家たらしめむとするもの

と嗤つたのも理ある事であつた。蓋し當時から我が小説壇の言文一致に就いて

我が言
文一致
の二大
缺點

はA)所謂地の文と對話との不調和とそれからB)口語體の動詞で時を表はす嚴密な規則が成立しないのが二つの大なる缺點であつて、明治三十六年發表した高木敏雄の『明治小説壇の革新』と題する論文中に此の點に觸れた部分があるから左に籍りる。

句法の緩急は動詞の「時」の撰擇に影響を及ぼす。試みに歐羅巴の大家の散文的敘事を見よ。本來の敘述的「時」即ち文法家の所謂持續過去と持續現在と章を異にして互に相連り篇中の人物をして自己の經歷を物語らしむる場合に於ても説者其人が直に身を過去に移して過去の人たると、現在の見地よりして靜かに過去を觀察するとの相違により或は持續過去を用ゐ、或は完了現在を用ゐて其區別を明にするに非ずや。今日の言文一致體の此の如き精密の區別を示すに未だ十分ならざるわれ之を知る。然れども某作者の如く特に讀者の注意を惹くべき一瞬時の出來事を寫すに大過去を用ゐ永々し

き句法を用ゐ、却てわれ等をして既に數百年前に終りたる長時間の靜かなる出來事の記録を讀むが如きの感あらしむるは殆ど之を忍ぶ能はざるなり。既に現代の人生の描寫をその目的とす、その用ゐる文體が明治の文體たらざる可からざるは勿論なり、われ等が日用ふるところの所謂漢字交り文はそが現代の思想を述べ現代の事物を叙し得る範圍に於て明治の文章たるのみ。最も進歩せる明治の文體は所謂言文一致體なり、われ等の理想はこの兩者の調和にあり、明治の小説は現今に於ては先づ此の後者を用ふべし、前者に至りては天才に非ざれば不可なり。唯茲に原則として守らざる可からざるは作の全體を通じて同一の文體を用ふべき事なり。之を稱して文體の一致といふ。この一致を缺くものは形式上文藝たるの價値を有せず明治の批評家と作者とは此の點に關して一般に趣味識を缺ぐ。試みに現代の大家と稱せらるるものゝ作を見よ。一篇の小説中、叙述描寫の部分に於ては

普通文を用ふるにも拘はらず、人物の對話に於ては言文一致の説話體を用ふるものあるに非ずや而して作者にその誤れるを悟らず、評家その不調和を咎めず。嘆すべき哉。

諸家の

意見

前者の地の文と對話との調和は三十九年の藤村の『破戒』以來うまく行つたのであるが後者「時」^{ラッセ}の問題は未だ残つて居る。けれども三十九年當時即ち『破戒』が世に出た頃においても言文一致は社會的に確立しない。試みに當時における識者の意見の二三を参照する。

□理想的言語を作れ——文章は單に言葉のまゝ——其のまゝに寫し出したのを以つて上乘とは云へぬ。もしこれを上乘とするならば、著音機は實に天下一の名文家である。……言語を良くすることを怠り、或は又忘れて居つて、文章を言語と同一に仕やうとするのは、進歩の大法に背いた墮落的、懶惰的、苟安的の考である。

幸田露伴

□漢文の羈絆を脱せよ。

芳賀 矢一

□先づ言語を改良せよ。

徳富 蘇峰

□早晚日本の文體も一定さるべき必要がありますが、或體に一定するとなれば何うしても言文一致體でありませう。

下田 歌子

□老成の文章家と言はれて居る連中で自分は言文一致は嫌ひだと言ひながら矢張り次第に此の文體に化せられて來たのは事實である。何々したと云ふ結尾が好ぬと言ふ人の文を見るにしたをしたりと改めた丈で、餘は言文一致だ。

内田 魯庵

□今の和漢文體は當分は中流以上の人が用ゐて一面樂むと云ふ状態になるであらう。然しそれが又一だん進むと言文一致が全く國民的のもの社會一般が用ゐる所の文體となつて、和漢文體は遂に専門家の手に渡さるのであらう。

上田 萬年

□言語の愛はやがて其の智識を産むのである。今日迄の言文一致は言語を愛する人々の手に依つて開拓された。……諸君は言語を愛するといふ心を抱いて研究の途に上られんことを切望するのである。島崎 藤村

自然主義
文一致

明治三十年代後半の我が小説文體を説くには必ず自然主義と聯關させねばならぬ。我が小説の内容を根底的に一變させて明かなエポックを作つた自然主義運動は文體の上にも亦勃興しかつて來た言文一致に強い理論的根據を與へた。さて自然主義は誰が提唱先祖であつたが知らぬが、之を口にした年代の上から云へば森鷗外など最も古い。明治二十九年十一月の日付してある鷗外の論文に

吾人の眼を射る文學の方の新顯象から云へば、佛蘭西のゴンクール、フローベルこの方製作に自然主義といふ名の附いた一種特異な產物がある。其の筆の使ひ方はどこまでも實際のまゝを平に叙して、くだらぬ事をも除か

す、特色のあることも別に氣をとめぬ。……………扱この第十
九世紀の新しい産物たる藝術は我國にどういふ影響を與へたか。此の間は
もとより明治このかたの藝術に對して發するのだ。文學の方を見れば、僅
に一人の二葉亭が自然派の一面たる心理的分析の作を出した事がある外に
は、擧げて云ふ程、此の影響を受けて居ぬ……………若し第十九世
紀の自然主義に根ざした藝術を包容するために昔の抽象理想的審美學が不
足になつたやうに、後の藝術を包容するために今の具象理想的審美學が不
足になることがあつたら、己は喜んで今の藝術觀をその方角に廣めもし、
又ずつと土臺から變へもする積だ。二十九年十一月 鷗外

田山花
袋と新
文體

けれども事實に於て之れが影響指導を最早く文體に與へたのは明治三
十九年以來『文章世界』文章講話の題下に田山花袋が自然を説き、セン
チメンタリズムの破壊を説き、傍觀的傾向、ローカルカラー、外面描寫、内面

描寫、平面描寫等を説き、『これからの文章』と題して

將來の文章において、書かうと思つたことを完全に顯はさうといふことに就いては充分に辭句も練り文體をも研究しなければならぬが、其内容に於ては、自然を御手本にするより他、他に人爲的的人工的小主觀的技巧を加へる必要はない。いや必要がないばかりではない。そんなことをすると折角切開いた草藪がまたもとの不毛の地になつて了ふ。

知識、觀察、自然に近い主觀の情——これがこれからの文章の要素と信ずる。

と云ふにいたるまで、最もよく文章を指導したものである。さて自然主義が文體の變遷と一番深い關係を有するのは實經驗を寫すと云ふ事である。此の傾向が遮二無二に急轉直下に言文一致を小説の文體として根柢を成してしまつたのである。

實經驗
を重んず
べし

小説に描く材料は實經驗で無くてはならぬと云ふのは自然主義主張の當然の結果である。此の作者の實經驗をそのまゝ寫せと云ふ主張は抱月泡鳴花袋天溪の諸氏が云ひだした事であつて、例せば花袋がその『描寫論』において

生死を堵しても實行に赴く人は、一種のキャラクターには相違ない。しかしそれは藝術家には遠い。

しかし實行は其の藝術の背景を成してゐる。であるから、私はかう云ひたい。熱烈なる實行家にして、それに捉へられざる忍耐と智識とを有せる人——精神上の火水の争ひをもじつと黙つて見て居るやうな人——

此處に至つて藝術家の心理の悲痛と云ふことが起る。熱烈なる實行の精神を有しながら、それに捉へられざる心の忍耐、苦痛。

と云つた如き、又島村抱月氏が『文藝と實行との間に描はる一線』において觀照

主義を説き、實行しながらそれを靜觀し味到する心境を藝術と云つたごときも此の主張であつて、抱月氏の實行觀照論は、すつと後の作ではあるが『斷片』と云ふ氏の小説中に

兄への義理、世間への義理もすまない。されどもやつぱり思ひ込むだ人も忘れられない。すまない私と忘れられない私とが闘つてゐるうちに、もう一人第三の私といふものが出來た。その私はたゞじつと二人の争ひを見て居る。時によると面白いとさへ思つて眺めて居る。私の今の覺悟といふのは、それだ。どつちに身方をしろたつて出來ないからの事だ。これでもう十年年を取つて居たら、すまない／＼の私に身方して、血管の中で煮える血をじつと抑へて、冷ましたかも知れないし、もう十年若かつたら、一も二もなく其の血の中に飛び込んで了つたらう。けれども今の私は其の眞ん中ほどに立つてゐる。さう此の頃では思ふやうになつた。

と云ふ一節が巧に氏の實行家としての藝術家、藝術家としての實行家の面目を現はして居るでは無いか。尙ほ泡鳴氏にいたつては極端なる實行論者であつて實行即藝術の主張は『新自然主義の結論』において

普通の自然主義を踏んで更に深く突き入つた僕等の新自然主義の生活や描寫には……僕等の實感を、刹那々々の變化中に全部として表象體現するのだ。換言すれば常に耽溺して常に新らしくその耽溺の淵は肉靈合致の自我その物であるのを發見することだ。

と云つたのに現はれて居る。是等の思想は直接作家を指導したと云ふのでは無くて、作家も批評家も（實際には又作家が自ら創作の主義を主張したのである）同時に感じて實驗描寫の風潮を捲き起した。藤村花袋獨歩の出現は多く實驗描寫と云ふ立場であるが、實驗ばかり描いては種に窮すると同時に當時喧しかつたモデル問題なども出た。實驗が絶対の主張ではない。要するに自然主義思潮

の知的要求から來た物質主義或は科學主義の叫びであつて、聽て之れがロマンチズムの方面の情的要求から來る主觀と合體して全我的活動をなすにいたるに従つて、實經驗描寫の慾が薄らぎネオロマンチズム等が主張されるやうになつたのである。さて實經驗を寫すとか眞實を描くとかの傾向の結果從來の小説にあつた文字上の遊戲は全然排斥される事となつた。即ち無技巧論、沒技巧論乃至新技巧論が盛に起り出した。

かう云ふ燎原の火のやうな勢で盛に新文體を説き新しい酒を盛るべき新しい革袋を要する聲、眞實に觸れよと叫ぶ聲などがどのやうに舊體の作家を刺戟したことであらう、其の模様は眞山青果が新しい潮流に對して俄に恐怖を覺え出した舊作家の心持を描いた小説『御詠歌』の左の一節に彰はれて居るではないか。

停滯して居た文壇は、その頃眞實と云ふ言葉に呼吸を吹き返した。一冬の間光つて居た藁屑が、春二三日の雨に腐れるやうに、舊い人は急に沈黙し

て「吾は人生の從軍記者なり」と云ふやうな叫聲が所在に起つた。私どもは然う云ふ間に、妙に革命的の調子を帯びて來る先生を、怪みつゝ眺めて居た。「僕と云ふものが知れるでせう。斯う云ふ時代があつたんだからね」先生は或る日四五年前の寫真など見せた。縞ものの二枚襲に、故と羽織を着ないやうな、疲せてる頃の寫真であつた。

「全く世間は才ばかりで通れるものと信じて居たよ。」

私は何時か舊い雜誌で讀んだ、先生がある夜カーライルの英雄論を讀んでひどく感激したと云ふ記事なぞ思出した。と、先生は笑ひながら脇をまくつて二の腕にある文身の炎跡や人に出せない創跡などを見せた。

没
技
巧
論

小説の文章に没技巧と云ふ事を説きだしたのは、文章の型を打破すべしと叫びだ田山花袋である。花袋は文章の型と云ふ事に就いて

私が明治の文壇に就いて特に深く感じて居ることは、文章に型が出来て、

其爲に没落の憂き目を見た者が多いといふことである。即ち一種の調子といふやうなものが出来てそれに乗せられて書いて居るうちに、知らずく型が厚くなり、自分で氣付いた時はもう二進も三進も動けなくなつて、遂に文壇的悶死をする。實に文學者にとつては型の出来るといふこと程恐しいものは無い。だから若し自分の文章に多少なりとも型が出来たと自覺したものは、一刻も早くその型を破つて出ると云ふことに全力を盡すべきだ。……要するに宇宙間のあらゆる現象は一事一物みな一つの言葉しか持つて居ない。その言葉を發見して、丁度それに當て嵌めて書き現はしたものが即ち最も好い文章で、且つ完全な文體であると思ふ。

と云つた。没技巧と云ふのは又全體から見て無脚色の小説と云ふ事と同じ變遷の浪に揉まれて居る。自然主義の洗禮を受けない前の小説に比べて見ると自然主義派の小説は慥に無脚色である。長谷川天溪の言葉を籍りて云へば軍隊の方

では豫定行動と云ふ語が用ゐられる。而して多くの作家は、作中の人物に同義の豫定行動を取らしめたのである。丁度司令官が活動方面の地圖に青線や朱線を劃して、某聯隊は甲地より乙地に、某師團はABC線を進めと命令する如く、作中の老若男女一群を、自己の編製した人生觀の地圖面に動かしたのであつたが、自然主義の小説ではさう云ふ豫定行動の練習では無く、始めから實戦をやつて居るのである。眞劍の筆を執つて居るのである。一生懸命だから何の餘裕も無い。夏目漱石の所謂セツバ詰つた文藝である。所謂技巧に丹念して居られぬ。茲が自然主義派の文藝と他の文藝と文體上において根本な差異を劃する所以である。

無技巧乃至沒技巧と云ふ言葉の一面には文章は下手でもいゝと云ふ是認がゆるされる譯だ。以前は小説家になる第一の要素は文章が上手でなくてはならぬと云ふ事であつたが、自然主義派はさうでは無い。尙ほ自然主義以前の文學に

あつても不思議にも文章が下手な爲めにバラドキシカルにも効果を収め得た作品が數ある。例せば廣津柳浪は其の一例だ。彼はあの時代で會話は別だが、文章の一番下手な作者であつた。

柳浪と
自然主義

柳浪と自然主義。此の間には何の縁故も連鎖も無い。けれども柳浪には何となく自然主義的暗示があつた様である。自然主義的小説には醜惡が材料になつた。そしてその醜惡が柳浪にあつては深刻小説となつた。「黒蜥蜴」に出て來る隻眼痘面の醜婦、『變目傳』に出て來る侏儒變目の醜貌は、寧ろ醜に過ぎた位である。たゞ自然主義は平凡を材としたに對し柳浪は之を材とすることが出來なかつた。柳浪が十年後れて文壇に出たら自然主義の陣頭に立つたかもしれぬ。當時にあつてさへ『めざまし草』は次の如く評した。

他人の書かむとも思はざる處、他人の書かむと思ひても敢て書かざる處、敢て書きても能く書き得ざる處に獨得の技を擅にして、今の小説壇に雄飛す

る此の作者が、此の篇は特に此の作者の一面の美を表はしたりと云ふべきか。文章の上より云へば、すらすらとして嫌味のところ無く、絢爛といふべくもあらざれど、さればとて乾古と云ふべくも無く、底光りすると云はゞ云ふべきものにて讀み行く中に目を射るやうなる奇抜勁拔の句に逢ふと云ふはにあらざれど知らぬ間に作者が與ふる情景に卒然として逢はしめられてハツとも思はせらるれば、ホツとも思はせらるることあるは、先以て我が敬服するところなり。おもふに作者の力を入るゝは辭句の間に多からざる代りに意の上に多しと云ふべきか。麗水と駢べ云はんは如何なれど、或意味にては麗水一方の極端ならば、此の作者また一方の極端なるべし。我は論無く此の作者に與せん。言葉づかひの手品をもて讀者の眼を惹かん如きは正面より云へば好ましからぬことなればなり。されど此の作者辭句の間に意を用ゐぬと云ふにはあらで、對話などは今の屈指の作者にも決

して劣れりといふ可からず。これまた我が實に敬服するところなり。次に此の作者が此の篇における用意として特に見ゆるは、今戸心中其の他に見えたる如くある事情を叙し、或る人の思を叙するに成るべく作者が直接の批評的説明若くは命令的説明を讀者に向つて發することを避けたることに是亦我が悦服するところなり。

鐘樓守
の翻譯

尙ほひとつ舊作家における面白い一例は尾崎紅葉が臨終の床にありながら翻譯したと傳へられるユーゴーの『ノートルダム、ド、バリ』即ち『鐘樓守』である。坪内逍遙が此の翻譯書に序した一節に

聞く山人が文を作るに忠なるや、身重痾の褥に在るも、刪潤校訂皆之をみづからし、雕心鏤肝の細巧、殆んど一日だも缺くことなかりきとか、然るに病革るに及びては流石の剛健なる意氣も、稍々萎え撓みけるにや、讀みて上卷より下卷に移るときは、故人が水壺の匂ひ次第々々にかすけく隠然と

して一種の病牀日誌につきて、日々病勢の進みゆく様を讀むが如き心地する、いと痛はし

と云ふ一節があるが、而も此の紅葉の雕心鏤肝の細巧が無くなるに従つて、反對に新しい効果を産むやうになつた事は左に引いた小島鳥水の評言にある通りである。

余は病勢は氏の文を削かずして却つて救けたりしを思はずんばあらず、いかにとなれば下巻の文の比較的洗煉を缺き、圓滑を缺き、短句、苦句、澁句錯落として瘦臂に横はり、地に抛ちたるどころ、文字倦鷲となりて、却て俄に沈痛の聲を發したればなり。酷しい哉修飾の眞を害する。

文體變
遷上の
最大區
劃

文章の力と云ふことに就いては明治四十二年の太陽臨時増刊『文藝史』の筆者が首肯すべき説をなして居る。曰く

紅葉は極めて客觀的ならむと企て、露伴は自己の理想——極めて

平凡陳腐なるものだが——を本位として居る。露伴は此くの如き理想むしろ空想が現實生活の上に實現せらるべきものか否かを考察せぬ。紅葉は其の描くが如き性情は現人生に見らるべものか否かを觀察して居らぬ。要するに共に明治の時勢を離れて、自分勝手の世界を夢見つゝあつたのだ。道に紅葉は客観的ならむと勉めたが故に表面上なりとも當時の明治時勢を書き現はした點もある。併しそれとても、根柢は類型で、たゞ明治の人情風俗に當て箝めたと言ふだけで、『浮雲』に見ゆるが如き深刻なる社會觀察もない。復た『書生氣質』に於けるが如き大膽なる描寫もない。然るに尙ほ當時の讀書界は彼れ等の作を歓迎し、文壇の名將は、紅葉を中心とせる硯友社一派と露伴とであると思惟したのは何故か。これ實に文章の力に外ならぬ。

太陽記者の謂所文章の力とは、即ち小説の現實的要素から分離した文體と云

ふ意味である。即ち内容と文體とが分裂して考へられる時代の小説に就いて云つたものであつて、明治文壇を文章の上から見て最も大なる區域を劃すべきは、即ち此の内容から遊離した文章力が、紅葉露伴を限りとして減びてしまつて、内容外形不離の文體が藤村獨歩花袋白鳥等によつて創められる間が、最も意義の深い文章の起源である。

世間の大多數の批評家は、美妙柳浪紅葉等によつて創められた言文一致の文體を以つて文體變遷上の最大なるエポックの様に心得て居るけれども、これは決して根柢からの革新でも何でもない。今日になつて言文一致の創始は、やれ美妙だとか、いや柳浪だとか、随分先祖争ひがあるが、誰が先祖でも此の方は偶然的であつてさう大したことゝは思はれない。眞の意味の功績は花袋や泡鳴や獨歩や藤村やによつて力説された没技巧論、無技巧論に歸すべきである。

紅葉露伴までの文章史は作者の學問や作者の境遇乃ち作者の個性や生活を

度外視しても辿つて來ることが出来るが、自然主義勃興の結果没技巧無技巧論の洗禮をうけた作家の文章にいたつては、文章が深くその作者の個性や生活に喰ひ込んで居り滲透して居るから、その文章史は生活の歴史であり個性の歴史である。

此の文章と生活の滲透と云ふことは、決してかの大町桂月等の所謂「文章は人格なり」の謂ひでは無い。桂月の文章即人格論は大昔からある。嚴密に云ふと文章と云ふ語は新代の小説に對しては用ゐられる言葉では無い。文章と云はずに描寫と云はねばならぬ。紅葉露伴以前は小説家となるには一通り和漢の典籍に通せねばならなかつた。けれども新しくなつてからは夏目漱石の如きさへ「小説家は無學でいい」と云ひだした。文章は不必要だ。文章は寧ろ描寫の邪魔物である。

二葉亭の『浮雲』が自然主義以後に認められたのは此の意味で頷うなづかれるではな

いか。硯友社時代一番文章の下手と云はれた作家が、一番長く生き延びて居るのも同じく頷かれるでは無いか。かくのごとく文章の上手下手と云ふ事を單に形式的に解して居た時代から、内容を主にし作者の個性を主にする時代への推移には實に驚くべき革命があつたのである。

露伴
自の文
體

上田秋成の『雨月物語』の白峯と典亭馬琴の『弓張月』の爲朝白峯陵に詣づる一節と幸田露伴の『二日物語』とは全く同じ材料を用ゐたものであるが、此の三者の間の差違はどうであらう。秋成の雨月物語は安永五年今から百三十九年前の著作であるが、明治三十一年の露伴氏の筆が別に進歩したとも思はれぬ。試みにその一節を比較して見ると、

現にまのあたり見奉りして、紫宸清涼の御座に、朝政きこしめさせ給ふを、百の官人はかく賢き君ぞとて、詔恐みてつかへまつりし。近衛院に禪りましても、藐姑射の山の瓊の林に禁めさせ給ふを、思ひきや、麋鹿のか

よふ跡のみ見えて、詣でつかふる人もなき……………

と云ふ秋成の文に對して露伴氏のは

九重の雲深く金殿玉樓の中にかしづかれおはしませし御身の、一杯の土あ
 さましく、頑石叢棘の下神隠れさせ玉ひて、飛鳥音を遺し麋鹿痕を印する
 他には誰ひとり問ひまゐらすものなき、かゝる邊土の山間に物淋しく睡
 らせらる御いたはしさ……………

となつて居る。別に文體の進歩も何もない。もとより露伴氏は二日物語におい
 て擬古的な努力をして秋成以上の舊式な文章を書かうと企てたのかも知れぬ
 が、茲に吾人が露伴と秋成との間に時代のギャップを認めないのは、露伴氏の文
 章に新代の句の無いのを云はうとするのではなくて、日本文の語路文脈が如何
 なる材料を取り扱つても、秋成や馬琴やの型以外に出ないことを云ひ度いが爲
 めである。尙ほ高山樗牛の『瀧口入道』が『平家物語』と同様であるのも一

例である。が之も其の樗牛がニイチエ主義を傳へるに文體上に何の不便も感じなかつた如く全く舊式な文體を以つてした露伴の『出廬』逍遙の『浦島』かぐや姫』の如き韻文體にさへも尙ほ且つ自由に新人生の複雑な問題が含み得らるゝを鑑みる時は果して眞の意味の文體の變化と云ふものは、如何なる點から必要とせられて起つて來たのであらうか。これは此の講義以外更に根柢から研究すべき一問題である。

寫生文
と新文
體

小説の文體に根本的の變化を與へた動力は疑ふまでもなく自然主義の運動であるが、自然主義以外に忘れてならぬものは明治三十二年正岡子規が雑誌『ほととぎす』に書き始めた寫生文である。

病の牀に仰向に寐てつまらなさに天井を睨んで居ると天井板の木目が人の顔に見える。それは一つある節穴が人の眼のやうに見えてそのぐるりの木目が不思議に顔の輪廓を形づくつて居る。其顔が始終目について氣になつ

ていけないので、今度は右向きに横に寐ると、襖にある雲形の模様为天狗の顔に見える。いかにもうるさいと思うて其の顔を心で打ち消して見ると、襖の下の隅にある水か何かのしみが又横顔の輪廓を成して居る。仕方が無いから試に左向きに寐て見るとガラス越しに上野の森が見えて其隙間に向ふの空が透いて見える。其隙間の空が人の顔になつて居る。丁度晝探しの晝のやうで横顔が稍逆さになつて見えるのは少し風變りの顔だ。再び仰向になつて今度は顔の無い方の天井の隅を睨んで居ると、馬鹿に大きな顔が忽然と現れて来る。

箇様に暗裏の鬼神を晝き空中の樓閣を造るは平常の事であるが、ラムプの火影に顔が現れたのは今宵が始めてである。『ランプの火影』字規

ある論者の如きは自然主義よりも今日の小説の文體を誘致したものは寧ろ寫生文であると力説して居る。さて寫生文が何故にかく文體變遷上重要な位置を

とるか。無論それには種々の説明がつくのであらうが、事實の上から見て此の派から夏目漱石、高濱虚子、伊藤左千夫、鈴木三重吉、長塚節の如き作家が叢り起つたと云ふ事が寫生文派の爲めに萬丈の氣焔をあげさせるに至つた大原因である。さて其の所謂寫生文と小説の文體とについて吾人は一考を要すると思ふ。

寫生文
と夏目
漱石

夏目漱石氏の小説は明治大正の小説壇における一つの大きな發現であつて、殊にその先蹤の辿る可きものが絶無である點で小説發展史上特筆せねばならぬ。氏は始め『ほととぎす』に倫敦塔を出したので、ほととぎす派即ち子規から脈を曳いた寫生文の一派の様と思ひ、多くの文學史家も亦その部類にいれやうとして居るけれども、田山花袋氏が

虚子は漱石に比べると、主觀の色が餘程薄くなつて居る。それだけ興味がないと共に自由になつてゐる。またそれだけ作の背景をなして居る作者の

主觀がぼんやりして居る。何うにでも出て行かれるやうな餘地を残して居る。虚子と漱石とは子規の脉を引いて居る、しかし虚子が其の正統であつて漱石はむしろそれから遠く離れて居る。漱石には今では寫生文と言つたやうなところが無いと言つても好い。

と云つた通り、寫生文脉にとつては傍系であり寧ろ根柢を別にして居ると云はねばならぬ。元來が寫生文脉と云ふもの左程根柢あり主張あつて生れたのではなくて、たゞ正岡子規が漠然理想派の文藝を排し、特に彼の淡々たる人格上の特色に従つていつとなく一派の風格を成した特色から『ほととぎす』一派の風が出て來たので、その出現は丁度、かの撥鬚小説が、武士道の變態たる仁俠趣味や傳法肌で日本人の特性に偶然當て嵌つたと同じ様に、多年談林風の俳諧や墨繪などで涵養された日本人の素朴、單純、平淡の特性に旨くぶつかつただけである。文藝批評家の見地から出した理論的革命的產物では無い。正岡子規自

身も寫生文の主張に就ては僅に『病牀六尺』の一節に

理想の作が必ず悪いといふわけではないが普通に理想として顯れる作には悪いのが多いといふのが事實である。理想といふ事は人間の考を表すのであるから、其の人間が非常な奇才で無い以上は、到底類似と陳腐を免れぬやうになるのは必然である。固より小供に見せる時、無學なる人に見せる時、初心なる人に見せる時などには、理想といふ事が其の人を感せしめる事は無い事はないが、略々學問あり見識ある以上の人に見せる時には非常なる偉人の變つた理想でなければ、到底其の人を満足せしめる事は出來ないであらう。是れは今日以後の如く教育の普及した時世には免れない事である。之に反して寫生と云ふ事は、天然を寫すのであるから、天然の趣味が變化して居るだけ其れだけ、寫生文寫生畫の趣味も變化し得るのである。寫生の作を見ると、一寸淺薄なやうに見えても、深く味はふ程變化が多く

趣味が深い。子規『病狀六尺』

と云つて居るばかり、極めて漠然たるものである。たゞ單純な元始的な寫實主義の主張としか思れぬ。殊に同じ『病狀六尺』に

目的が其の事を寫すにある以上は假令うるさいまでも精密にかゝねば、讀者には合點が行き難い。實地に臨んだ自分には、こんな事は書かいてもよからうと思ふことが多いけれど、それを外の人に見せると、そこを略した爲めに、意味が通せぬやうな事はいくらもある。……………自分の經驗を其儘客觀的に寫さければならぬ。(三十五年八月廿八日)

と云つて居るが、此の主張は元來漱石が反對の立場に立つて居るのであつて、子規の此の細寫主義に對して漱石は『文學論』において

素人の考を以てすれば吾人の心に浮ぶ意識をその儘有體に紙上に寫すことは左程困難ならざる様思はる可けれど試みに靜座して吾が腦裏に出現し來

るところのものを追究する時は其の意外に煩雜なるに驚くべし。かの宗教家が無念と云ひ無想と唱ふるは皆此の妄念雜念の世の中を知り盡して始めて口にし得べき言語なり。走馬燈の如くに廻轉推移して非常の速度中に吾人意識の連鎖を構成する成分を一々遺漏なく書き出さんことは決して人間業に非ず。『文學論』二五五頁

と唱へ、科學の時を重んずるに逆に文學は時間を全然没却するものとし、覺悟印象のみを以つて眞偽を決し、且つその得意の間隔論において作家は燃ゆるが如き情熱を以つて作中の人物に同情せねばならぬと主張しその引例にあげたゴールドスミスとバーンスとの詞の比較においても極力バーンスを賞揚して居る位である。

しかるに此の夏目漱石が何故に非人情小説とか餘裕派とかを主張しだしたか。

漱石と
露伴

それには當時の文壇に於ける種々の事情と文學者としての漱石の立派との關係、云はば一種の處世的見識と云ふものがあつたからとも云はれる。が要するに漱石は文章家であつて文章に重きを置き、一種の理想家であつて、子規などよりも露伴に近い。彼と露伴との比較は曾て浩々歌客が

漱石の文を露伴のに比し候時は、露伴のは漢文和文(所謂)より來り、漱石のは英文俳文(特に寫生文)より來れるの別あり。露伴は描寫の筆路を客觀に行りながら主觀蔽ふべからずなりゆき、漱石のは文體は人格なりと云ふシヨールペンハウエルの説の如く、その文は人格の現はるゝを期しながら且つ客觀に之くの傾あるに似たり、前者は自家の理想を蔽はんとしてその個性の力勁きが爲めに鋒銛自から露はれ、後者は自家の理想の含まれたるものを殆んど個性の露るゝ刹那に於て、客觀的に放過し去る、試にわれ等が好んで用ふる漢詩論の神韻と空靈との品類を以て視候はんに、漱石の文の精

髓は神韻にして露伴の文の極致は空靈に在りと申すべきか。

と評したごとく純客觀の寫生文派とは餘程離れて居る。漱石自身の素養から云つても文章に執する方で、その文章の愛憎についても次ぎの様な事を云つて居る。

一體自分は和文のやうな柔いだら／＼したものは嫌で、漢文のやうな強い力のある即ち雄勁なものが好きだ。また寫生的のものも好きである。けれども俳文のやうな妙に凝つた小刀細工的のものは嫌ひだ。俳文は氣取らないやうで、ひどく氣取つたものである。これを喜ぶのは丁底樂隱居が古茶碗一つをひねつて嬉しがるのと同じ事だ。徒らにだら／＼した「源氏物語」みだりに調子のある「馬琴もの」「近松もの」さては「雨月物語」なども好まない。「西鶴もの」は読んで面白いと思ふがさて眞似る氣にはなれぬ。漢文も寛政の三博士以後のものはいやだ。山陽や小竹のものはだれて居て厭味である。自分は嫌だ。

漱石の
所謂餘
裕派

自然主義のセツパ詰つた文藝に對して、夏目漱石は一寸買物に行つて神樂阪で遊んで來ると云つた様な餘裕のある文學を主張した。此の主張は自ら外形の上にも表はれて來た。彼の文章は眞實とか實經驗とかに忠實と云ふのではなく、讀者の意表に出るやうな奇拔な警句で充滿されて居る。そして幾らでも文字を弄ぶ。例せば『艸枕』の一節で次に引いた例などは自然主義の小説家なら二行で書いてしまふ。獨歩なら單に「散髮屋の主人は手荒く余が頭を掻き廻した」位で済ましたのを、漱石は何度までもミルトニツクな形容を弄して居る。

『頭垢よけたけ丈落して置くかね』

親方は垢の溜つた十本の爪を、遠慮なく、余が頭蓋骨の上に並べて、斷はりもなく、前後に猛烈なる運動を開始した。此の爪が、黒髮の根を一本毎に押し分けて、不毛の境を巨人の熊手が疾風の速度で通る如くに往來する。

余が頭に何十萬本の髪の毛が生えて居るか知らんが、ありとある毛が悉く根こそぎにされて残る地面がべた一面に蚯蚓腫にふくれ上つた上、餘勢が地盤を通して、骨から脳味噌迄震盪を感じた位烈しく、親方は余の頭を騒ぎ廻はした。

「どうです、好い心持でせう」

「非常な辣腕だ」

高濱
虚子

漱石は寫生文脈ではないが、虚子は純粹に此の派を繼承して居る。そして又小説の文體の變遷に及ぼした寫生文の影響など云ふことも餘程な自信を以つて説いて居る。彼は明治四十年頃寫生文の純客觀的態度より主觀的態度にかはりつゝあることを認め、寫生文の發達に努めた事は特筆すべきである。明治四十年頃虚子は自ら

もとより寫生文も技巧ばかりではない。内容の方にも主張がある。けれど

も技巧の點に於ては今日迄の文壇にありて、急先鋒に立つたと云ふことに躊躇しない。自然派の叫聲は寫生文派の者にも多少の刺戟を與へた。けれども寫生文派の文章が今の文學に直接に及ぼした影響は決して少くない。若し今日に於ける新技巧を論せんとならば、決して寫生文を闕却することは出来ない。寫生文の主張するところは文字通り寫生である。自然の寫生である。如何に自然を寫生すべきかにある。即ちフローベルの一字を苟もすべからざる程度に於て、我等はいかなる思想をも自由に表白し得ると信する。ナチュラリズムはもとよりシムボリズムとかミステシズムとかの何れたるを問はず、悉く技巧の上に習練を要することは無論である。寫生文家は今日尙ほ主として新技巧に向つて不斷の努力を續けつゝある。寫生文家がナチュラリストとなるかシムボリストとなるか新ロマンチストとなるかは未來の問題である。

と云つて寫生文の爲めに文章變遷史上に重大なる位置を要求した。吾人も此の要求を妥當だと思ふがしかし寫生文は日本の小説壇の開拓に渾身の勇を出して働いたのだとは認めないで、偶然にサイマルテニアスリーに起つた明敏な頭腦の働きが、端なくも自然主義運動と偶然の一致を見たのであると斷ずる。

近代文
藝の特
相

さて近代文學は内容と形式とが一致して居るから内容を度外視して外形を論ずる事は不可能である。最近代の文體の特相は内容の特相と一致する。その内容の特相に就いて島村抱月が

- (A) 個人主義的
 - (B) 幽鬱的傾向
 - (C) 生活難
 - (D) 現實暴露の悲哀
- の四つを數へあげた。

此の四特相は誰しも首肯する處であらう。そして此の特色は一々自然主義勃興以後の文體に特相をなして居る。無論二十年前後の才子佳人を描いた小説や撥鬢小説などには秋毫も見られぬ處である。(A)の個人的主義的傾向は材の上から見れば自分一個人に關する事件までが描寫の料となると同時に、文章が下手ならば下手ながらにその人の個的な特色として尙ほ且つ立派な文藝の要素となり(B)の幽鬱的傾向は科學の發達急にして生活が極端に多忙になり煩瑣になつた結果人間が神經過敏となり小説の文體の如きも極めて微細な點にも神經の微動を見せるやうになつた。(A)の例が岩野泡鳴小川未明ならば(B)の例は水野葉舟があり森田草平がある。便宜の爲めに次ぎにその例を掲げる。

電柱から電柱に繋つて黒い繩のやうなたるんでゐる線は灰色の曇つた空の下に遠くまで連つてゐる。其の行衛を見ると遠くの森が黒くなつて何處やらの製造場の煙突から黒い煙が上つてゐる。何處を見ても晴れた青い空も

見えなければまた賑かな喜ばしい色合も見られなかつた。

英太は行くべきあてもなく電車路について歩き出した。方角も分らなかつたけれど北と思つた方を指して歩いて行つた。赤い電柱が泣いてゐるやうに淋しく立つてゐる。其處を曲つて森の方に来ると公園の入口であつた。

青銅で鑄られた門が立つて居る。彼は其門を通つて公園の中に入つた。

冬枯のし盡した淋しい公園には獨り櫛の木の葉が白い裏を返してさわ／＼と寒い風に吹かれて鳴つてゐた。而して葉の落ち盡した青桐の木や柳の木が禿頭の人のやうに立つて居る。ある木は神經の鋭い無學の男の立つて居るやうに思はれた。ある背の低い木は優しい寢れた女の頭髮の亂れたやうに細かな枝を擴げて垂れて居た。……………未明の『露』より

暖かい、水蒸氣の立ち罩めた……………もう春も手の届く處にある様に思はれる晩であつた。私は森の中に住んで居る人を訪ねて歸つて來る時。……………

……私を送ると言つて一所に家を出て來た人と二人連れで其薄暗い森の中を出て、話しながら歩いて來た。

道の傍にはばら／＼に家があつて、片側に若い人の丈を隠す位な杉が植つて居る。その間からはもう、家に燈がつきはじめた。——全くの黄昏ごろで、逢ふ人の顔が、薄い闇の中から、ぼつと浮んで居るやうに見える。

その道をうね／＼歩いて來た。二人はこの薄ら寒い、ぼつとした、うるんだ様な夜をしみじ／＼と身に感じながら、話もせずに行く。

ふと目の前に黒い人影が浮ぶ様に見えた。………そして、すれ違つた。

………と、私が振り返ると、目の前に女の顔が見えて白い齒を出して、つと笑つた。

私は止まつてしまつた。そして息をひそめて、四邊を見た。………女の後影は黒く見える。二三軒の家からは燈火がちら／＼見える。………空

にはまだ薄いが晝の光が何處かに残つて居る。星が光つて見える。

私の動かないのを見ると、友は「何うした」と言ふ。私はふと言つた。

「何だらう」

「何が？」

「何が？………つて今の女さ」

「今の女つて何だ」

「………」

「………」

と私の目には白い齒——女の笑つた時に見えた白い齒が、薄闇の中にはつきり見える。何處からとも知れず、血の温みの無い顔が、霧の中からふつと見えてにつと笑つた様だ。

「吾々の目に見える世界。………」と、今、自分が立つて居る處が狭く、薄霧

の奥に他の世界が思はれる。……今は——この春の黄昏……女の
白い齒が深く眠つた夜の夢にも思はれるが、私は、私はふところろの
目で形の見えない世界の事を思ふ——葉舟

(D)の生活難に至つては正宗白鳥があり(C)の現實暴露の悲哀を描いて田山花袋

三つの
イズム

がある。普く知られて居るから例を引くまでもあるまい。無論此の四
特相は内容の上から云つたもの。近代の作家は誰も皆此の特質を具有
して居る。更に文體そのものうへに表はれた明かな特色を尋ねると次ぎの三
つのイズムが非常に強い影を投げつけて居る。

(一) 官能主義 Sensualism

(二) 印象主義 Impressionism

(三) 象徴主義 Symbolism

である。所謂文章で讀ませた時代には官能を経て來る文學などはあまり用ひな

かつた。まして嗅覺、觸覺に訴へるやうな文藝は無かつた。官能的な特色を發揮した作家は水野葉舟の如きがあつて別に引いた例など好適なものであるが、茲には小説ではないが北原白秋の「思ひ出」の序を特に例に曳く。

長い霖雨の間に果實の樹は孕み女のやうに重くしなだれ、ものの卵はねばねばと潜水のむじな藻にからみつぎ、蛇は木にのぼり眞菰は繁りに繁る。

柳河の夏はかうして凡ての心を重く暗く腐らしたあと、池の邊に鬼百合の赤い閃めきを先だて、、烘くが如き暑熱を注ぎかける。

日光の直射を恐れて羽蟻は飛びめぐり、溝渠には水溜れて悪臭を放ち、病犬は朝鮮薊の紫の刺に後退りつゝ、咆え廻り、蛙は蒼白い腹を仰向けて死に、泥臭い鮎のあたまは苦しさうに泡を立てはじめ。七八月の炎熱はかうして平原の到るところ街々の激しい流行病を仲介し、日ごとに夕焼の赤い反照を浴びせかけるのである。

この時、海に最も近い沖の漁師原には男も女も半裸體のまゝ、紅の西瓜をむさばり、石炭酸の強い異臭の中に晝は寝ね、夜は病魔退散のまじなひとして癒れた街の中、或は堀の柳のかげに Banjo (椽臺) を持ち出しては盛んに花火を揚げる。さうして朽ちかゝつた家々のランプのかげから、死に瀕した虎刺拉患者は恐ろしさうに蒲團を匍ひいだし、ただちつと薄あかりの中に色變へてゆく五色花火のしたたりに疲れた瞳を集める。

(二)の印象主義の作例としては島崎藤村の『春』に幾多好適例を見出す。印象主義の簡単な説明として田山花袋の語を籍りる。

印象主義は、客觀的外面的でなければならぬ性質を持つてゐることを私は曾て言つた。印象主義は眼から入つて行つた藝術である。色彩を重んじ刹那の感じを重んずるも無理はない。

印象風に出て行つた作品は、唯其の外表面から受ける感じ——それに由つて

味はれる味はひより外に何物をも要求して居ない。見る人の解釋の何物をも容れないと共にまた何物をも容れるといふ餘裕がある。

眼だけで、頭腦まで入つて行かない處に此の主義の面白味がある。

(三)の象徴主義は二葉亭の譯したアンドロフの『血笑記』田山花袋の『一兵卒』などよき模範を示した。舊派の作者が比喻を用ゐて説明するのを新しき作者は隱喩を用ゐ、更に進むで象徴を用ゐるやうになつた。試に永井荷風の小説『牡丹の客』の結末にある

唯さへ濕氣の多い場末の事で、往來は随分泥濘ぬかつて居る。自分は女と二人で水溜りをよけながら門を這入り大きな古木の鉢物を置き並べた敷石を傳つて行くと、雨を避ける低い葭簀の天井に、夕暮の光を遮つて奥庭一面は驚く程眞暗であつた。丁度二三人の女中が數多く釣した石油ランプに火をつけ廻つて居る處で、列をなして植付けし牡丹の花は、鈍く黃い灯の光の

達く處だけ朦朧として、僅に夕闇の影の中に浮出して來る。然し大方は散つてしまつて、然うでないものも憂はしく色が褪めて、蓋ばかりが黒く大きく開いて居る。強い日の光や爽かな風に曝して置いたら疾に潔く散つて了つたものを、人の力で無理やりに今日までの盛りを保つた深い疲勞と倦怠の情は、庭中の衰へた花一輪づゝから湧き出して、丁度それに能く似た自分等二人の心に流れ通ふやうな氣がした。佇んで見て居ると風も無ければ歩く人の足音も無いのに、彼方の花もこなたの花も、云ひ合したやうに重さうに花瓣を絶え間なく落す。花瓣は黒い葉の面に止まるのもあれば其處はもうランプの光の達かない葉蔭はかげの土に滑り込んで了ふものもある。時間が遅いのと時節が過ぎたのとで、見物の人は這入つて來ない。外の河岸通りでは依然として子供が囁す唄の聲が、折々は人數の夥だしく増えるらしく高まつて聞える。

「本所の牡丹てたつた此れだけの事なの」

「名物に甘いものなしさ」

「歸りませう」

「あゝ歸らう」。

の一節を見るに、これは牡丹の花と男女との運命を比喩的に並べた様にも思はれるが、單なる比喩、アレゴリイでは決して無い。其處に一種の象徴味があるのであるが、それが極無意識に働いて居る。象徴主義は此の味ひを強く出すのである。

ソフト

な文體

以上三つのイズムを綜括して考へると、臆げながら新文章の特色がうかがひ得られる。或る一派の評家が長田幹彦の小説を新しい俗受小説だと云ふ。よしそれを俗受小説だとするも、昔の俗受小説に比べて尙ほ此の三つのイズムの洗禮を受けて居ることは明白である。此の三つのイズムの影響を總

勘定して見て後に定つた自然派文藝の新特色は島村抱月が

殊に自然派の文體を見ると、著しくソフトになつて來たといふ事實が認められる。是はやはらかなになつたといふ意味であるが決して柔弱になつたと云ふ意味では無い。即ち畫家彫刻家などが使ふ専門語の上のソフトであつて言ひ換ふれば感情思想がごく細かな屈曲したところまで出され易くなつて來たといふのである。丁度彫刻家が佛像を刻む場合に木は堅いけれども名人がやれば曲線、直線が自由に美妙に、やはらかに出て來ると同じく、文體上に於ても作者の思想感情が動くまゝに出て來た。即ち全體として硬ばりが取れて、内の曲折がよく出て來るやうになつたのである。

と云つたのを結論とする。かくの如く明治の初期以來何等かの方面へ新活路を見出して古文脈や徳川文學脈や又は漢文脈を脱しやうと努めて止まなかつた明治の文章は、兎にも角にも現代的口語と合致した地盤の上に自由な繊細な明快

な的確な表現に役立つまでに發達して來たのである。云ひ換へれば舊來の制約的乃至遊戯的の境地から、生活そのものと併行して自由な發展をなし得る境地まで日本の文章が進歩して來たのである。もつと平たく云へば言ひ表はさうとする事を言語や文體の爲めに制限して甘んじて居る境地から、言ひ表はさうとする事を本位として自由に變化し發展し得る境地まで進んで來たのである。而してこゝまで來て始めて始めて文章の個性化——即ち書く人の個性に應じて文章を自由に変化あるやうにする事が可能となるのである。

明治小説文章變遷史 終